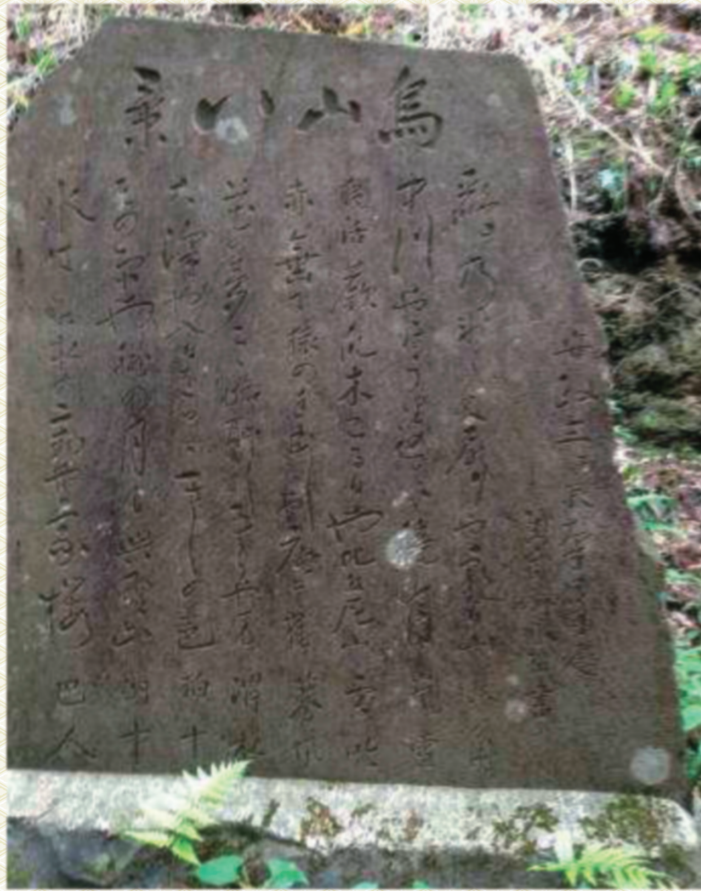


蕪村の師

巴人と潭北そして烏山八景句碑

江連 晴生 著

蕪村の師 巴人と潭北そして烏山八景句碑



烏山八景句碑(那須烏山市東江神社境内)



巴人句碑(那須烏山市落石)

江連 晴生 著

蕪村の師・巴人と潭北そして烏山八景句碑（目次）

	第一	蕪村の師・巴人と潭北そして烏山八景句碑	2
	一	蕪村と巴人と潭北と烏山八景句碑とを結びつけるキイワードは何か	2
	二	謎に満ちた「烏山八景句碑」の変遷と巴人奉納句鑑賞	4
	三	「烏山八景句碑」の深い謎	12
	第二	芭蕉没後の元禄俳壇と烏山八景句碑鑑賞	17
	一	芭蕉没後の元禄俳壇の動向	17
	二	「烏山八景句」が奉納された元禄十五年（一七〇二）前後の時代史的背景	20
	三	「烏山八景句」関連鑑賞	20
	(一)	はじめに（「烏山八景句」四つの句形）	28
	(二)	其角の句鑑賞	36
	(三)	嵐雪の句鑑賞	42
	(四)	専吟の句鑑賞	45
	(五)	琴風の句鑑賞	50
	(六)	渭北の句鑑賞	55
	(七)	柏十の句鑑賞	61
	(八)	湖十の句鑑賞	66
	(九)	巴人の句鑑賞	73
	(十)	斟斗（斟計）の句鑑賞	84
跋	(十一)	おわりに（潭北を中心にして）	93
			106

参考一 「烏山八景句碑」の作者とその周辺の俳人たち

二 早野巴人と常磐潭北の対照年譜

三 「巴人来鳥」(皆川晃著・早野巴人顕彰実行委員会刊行) 周辺覚書

四 参考文献

122 120 112 107

第一 蕪村の師・巴人と潭北そして烏山八景句碑

一 蕪村と巴人と潭北と烏山八景句碑とを結びつけるキーワードは何か? ↓ 赤穂義士・大高吾
(俳号Ⅱ子葉)

(情報1) 『新花摘』(蕪村) ↓ (前略) 常盤潭北が所持したる高麗の茶碗は、義士大高源吾が秘蔵したるものにて、すなはち源吾よりつたへて又余(注・蕪村)にゆづりたり。(後略)

(情報2) 『大田原史前編』(大田原市編集委員会編) ↓ 「佐久山の実相院に四十七士で有名な大高源吾とその弟の小野寺幸右衛門(小野寺十内の養子)そして実母の三人の墓・位牌・過去帳が実在している。」

(情報3) 『栃木県史(通史編四・近世一)』 ↓ 「元文元年(一七三六)、潭北は病を得て佐久山に居住する弟の所に身を寄せていたことがわかり、また願書を出した弟渡辺嘉兵衛は烏山藩にあって士分格の身分を持った人物であったことが知られる。」 ↓ (烏山町中央「若林昌徳家文書」) ↓ 私兄常磐潭北儀永々相煩、野州佐久山町弟渡辺次左衛門方ニ罷在候間

罷越度願 渡辺嘉兵衛

(情報4) 蕪村の初撰集『寛保四年宇都宮歳旦帖』(寛保四年・延享元年・一七四四)に「佐久山 潭北」として、「梅が、(か)や隣の娘嫁(か)せし後」の句を寄せており、この年の七月三日に没している。

(情報5) 『烏山町史』(常磐潭北Ⅱ小口芳夫稿) ↓ 晩年の潭北の遊説区域は、次第に関東から奥羽地方へ拡大し、白河に一泊したときの作に、次の詩句が残っている。(漢詩省略) この七言絶句の一篇のあとに、「道聞(きき)て一ト夜とまらん閑の夜 渡辺潭北拜」、珍しく「常磐」姓を用いず、彼の署名にあまり見られない「渡辺」姓を用いている。

(情報6) 「栃木県史しおり」(史料編近世8月報「俳諧と農民教化―常磐潭北雑感―」Ⅱ村上喜彦稿) ↓ 元禄十六年(一七〇三) 其角同門で潭北と交遊のあった大高子葉(赤穂義士) 切腹、子葉三十三歳、潭北二十六歳。

(情報7) 『からすやま文学の碑散歩道』(皆川晃著)の「落石地内41早野巴人句碑」 ↓ 元禄十六年(一七〇三) 二十七日 二月四日、赤穂浪士自刃、「類柑子」に「孤芳を探るかうばしき骨や新茶の雲の色」が入集。(注:「類柑子」にこの句が入集したのは、其角が没した宝永四年Ⅱ一七〇八で、この句は其角追悼句で子葉追悼句ではない。)

(情報8) 『烏山町史』(近世・転封Ⅱ小口芳夫稿) ↓ 元禄十四(一七〇一)年三月、赤穂城主浅野長矩が、吉良良央を江戸城中において斬りつけ、切腹の上浅野家は断絶したいわゆる赤穂事件が起こった。このため赤穂城はしばらく幕府の管理下にあったが、元禄十

五年九月、烏山城主永井伊賀守直敬が、三千石の加増を受け、三万三千石をもって赤穂へ転封となった。永井氏の去った後の烏山城は、新城主の着任までの間、空城となって幕府代官の管理下にあった。

(管見1) 赤穂義士の一人の大高源吾(俳号・子葉)は、烏山出身の俳人、早野巴人と常磐潭北の其角門の兄弟子に当たる。その兄弟子の子葉が、元禄十六年(一七〇三)に自刃し、泉岳寺に葬られ、その後、子葉の遺族が、佐久山大高家の菩提寺、実相院に遺髪などを埋葬し、その墓を建立する時に、当時、江戸在住の巴人と烏山在住の潭北とは相互に連絡を取り合いながら、その遺族の片腕になったのではなからうか?(その時の形見分けのようなものが、蕪村回想録の『新花摘』の「大高源吾秘蔵の高麗の茶碗」で、それを、潭北が所蔵していて、それを蕪村に伝授したということではなからうか?)

二 謎に満ちた「烏山八景句碑」の変遷と巴人奉納句鑑賞

(情報9) 『杖の土』(宋屋) ↓ 「野州烏山滝田天満宮に往昔亡師(注・巴人)が奉納した」俳額について、次のように掲載している。宋屋の奥羽行脚は延享三年(一七四六)で、この時には、巴人も潭北も没している。蕪村は結城・下館、そして、江戸の増上寺裏門辺



(大田原市佐久山・実相院)

りに居住して、宋屋は蕪村を訪ねていたが、宋屋は蕪村には会えなかったことが記されている。

朝日山 鶯の氷らぬころやあさ日やま 東武 其角

中川 中川やほほり込んでも臙月 嵐雪

比丘尼山 独活蕨つま木（注・薪）こる（注・伐採する）日やびくに山 専吟※

前垂山 赤だれに猿の手もがな（注・欲しい）庭雲雀 琴風※

五郎山 花の夢ころはづかし五郎山 後名淡々 渭北※

桜井里 水聞（注・水番のことか？）の耳のうごきや家ざくら 願主 巴人

牧野 筑子（注・こきりこ竹の楽器）もまき野の藪は雉子の声 鳥山 斟計※

（注・斟計の「計」は「斗」と草書体が類似し「斗」か（？）句碑建立の大鐘新斗と関係ある俳人か？）

元禄十五壬午（注・一七〇二年）春

（情報10）『安達太郎根』（淡々||前号・一世渭北）↓「烏山八景句碑」に登場する渭北（淡々）が「奥の細道」の行脚の途次に、「烏山天満宮を拝し」、巴人が奉納した俳額を次のように掲載している（二世渭北||麦天は、蕪村の知友で、蕪村の「新花摘」の最終場面に登場する。そこで「義士四十七士式家（注・高家）の館を夜討して、亡君のうらみを報い（以下略）」の其角書簡（秋田佐竹藩重臣・梅津半右衛門ノ尉||其角門の其零宛）を麦天が所蔵していて、蕪村に譲ると言う申し出を固く辞退したとの記載がある）。

中川やほうり込んでも臙月

鶯や氷らぬ声を朝日山

独活蕨妻木こる日や比丘尼山

嵐雪

其角

専吟※

赤だれに猿の手もがな底雲雀
宵闇の華に鞍なし五郎山
水聞の耳の動きや家ざくら

琴風※
渭北※
巴人

(情報11)「松木淡々年譜稿」(「俳文芸三九号・四十号」・白数了子稿)↓元禄十六年(癸未)一七〇三 三十一歳 ○七月下旬 芭蕉の跡を慕い、奥羽行脚に立出。(中略)◇両吟半歌仙 斟計・渭北(烏山にて)(以下略)。

(情報12)『からすやま文学の碑散歩』(皆川晃著)に次の記載などが見られる。

その一(下境・佐藤家文書 桧山豊山写) 〓(注・現存する「烏山八景句碑」の句形)

朝日山	鶯の氷らぬ声や朝日山	其角
中川	中川やほうりこんでも朧月	嵐雪
比丘尼山	独活蕨爪木こる日や比丘尼山	雪吟※
赤垂瀧	赤垂に猿の手ほしや底雲雀	蓼風※
五郎山	花の夢心恥かし五郎山	渭水※
大沢	大沢や入日をかえす雉子の声	栢十
興野	その原や朧の月も興野山	湖十
桜井里	水聞の水の動きや家桜	巴人

(注・※雪吟 〓専吟、蓼風 〓琴風、渭水 〓渭北の誤刻)



(那須烏山市 東江神社境内)

その二 この「佐藤家文書」は、「下野国那須郡瀧田村朝日観音江奉納額写」で、「寛政元

乙酉十二月二十五日奉納」とあり、「寛政元年」（一七八九）に奉納したものの写しである。ここには、上記の八句の他に、「其外」（江戸の存義・百万の句などの八句）と「奉納四季」（鳥山藩大久保家の家臣団の句など十二句）が収載されている。

その三（皆川晃氏の私解Ⅱ上記の現存する句形の※を修正したもの）

朝日山 鶯や※氷らぬ声を※朝日山

中川 中川やほうり込んでも朧月

比丘尼山 独活蕨爪木こる日や比丘尼山

赤垂洩 赤だれに猿の手もがな※底雲雀

五郎山 花の夢こころ恥かし五郎山

大沢 大沢や入日をかえず雉子の声

興野 その原や朧の月も興野山

桜井里 水聞の耳※の動きや家桜

其角

嵐雪

雪吟※（専吟の誤刻）

蓼風※（琴風の誤刻）

渭水※（渭北の誤刻）

栢十

湖十

巴人

その四 朝日山Ⅱ現在の句碑のある山のこと。中川Ⅱ那珂川。比丘尼山Ⅱ朝日山の北方に連なる丘陵。赤垂川Ⅱ霧ヶ沢といわれる川で、赤垂洩から那珂川に流れ込む。五郎山Ⅱ比丘尼山の北西に位置する丘陵か？大沢川Ⅱ境地区の北部に位置する谷間に拓けた村落を東から西に流れる川。桜井の里Ⅱ那珂川の河岸段丘に拓けた村落一帯、現在の坂下から滝田にかけての呼称（「牧野の里」の写真が掲載されているが、この掲載されている写真は「桜井の里」の写真か？「牧野の里」の説明はない）。

その五 現存する「烏山八景句碑」には、冒頭に「安政三丙辰南呂再建、善哉庵永機書」とあり、上部に「烏山八景」と刻まれている。「安政三丙辰南呂」は、「安政三丙辰」（一八五六年）の「南呂」（仲秋・八月）のこと。「善哉庵永機」は、「穂積氏」で、其角堂七世を嗣承している

（情報13）『七木雜記帖』（手塚七木著）所収「夜半亭巴人ノート」（俳誌「こだち」が初出）↓「烏山町泉町黒崎寿先生からご教授頂いた」として次の四点が記されている（なお、江口家と早野家は遠縁に当たり、渙先生の紹介で、早野家後裔徳造氏未亡人に会って、『夜半亭発句帖』などを閲覧したこと、また、二人して「烏山八景句碑」を見たことなどが記されている）。

① 滝田村天満宮は現在烏山坂下に奉遷、旧赤坂町の地続。

② 句碑の脇の神社は東江神社と申し、朝日観音と共に明治以前は堅城院（真言宗）の境内にあり、今は廃院となり社堂のみ残る。

③ 烏山八景碑は烏山藩北町の侍宅にありしものを光琳（姓は大鐘、晩年眼疾）手さぐりで発見し、東江神社へ移建。（注Ⅱ「光琳」は「新斗」（八景句碑の説明板にある願主の「大鐘新斗」か？））

④ 水聞の句は赤坂を読み、「赤坂」というところは那珂川の出水を番するところで、句の意味もその川の水勢を聞く「水聞」として一般に言われていたところで、「水聞の水の動きや家桜」で一応納得した。

（参考）江口渙先生は、「水声（すいせい）の耳のひびきや家桜」で、那珂川の水声の句であらうという理解であったとか（七木氏はその渙先生の見解は、嵐雪の「那珂川」の句と重複するとの疑問があったと記している）。

(管見2) 巴人の句の「耳」か「水」かということについては、巴人が奉納した日付(元禄十五年春)に近い、渭北(『安達太郎根』)と宋屋(『杖の土』)の句形の「耳」が、その原形のように思われる。そして、その奉納から八十七年後の寛政元年の「佐藤新二家文書」になると、「耳」よりも「水」という理解が一般になされていたのではないか?(その「佐藤新二家文書」と同じもので石碑にした現存の安政三年の句碑は、当然に「水」の句形で、句碑の作者中「専吟」と「琴風」との誤記も踏襲している)。

(管見3) 巴人の句の「耳」と「水」との二通りの句形から、この謎句の一端が見えて来るように思われる。

① 桜井里 水聞の耳の動きや家桜 ↓「馬耳東風」が隠されているのではないか?

(句意は、水番の耳の動きは、「馬耳東風」でそよとも動かない。「桃井の里」は平穩そのもので、折りからの東風で、どの家の桜も満開である。季題は「山桜」に対しての「家桜」。「隠題」になっていて、下五の「桜」と、上五の「水聞き」||「井」組で「桜井の里」。) ② 桜井里 水聞の水の動きや家桜 ↓「我田引水」が隠されているのではないか?

(句意は、水番が水の見張りをしている。その水の動きは、「我田引水」で、その「桜井の里」の水番の田の方に流れている。それを象徴するかのように、その水番の家の桜はとりわけ見事である。「季題」と「隠題」については、①と同じ。)

(管見4) 芭蕉没後の当時の俳壇は、其角の「洒落(しやれ) 風俳諧」(奇抜・奇計な見立てや趣向を第一として、機知的な謎句仕立ての句作りなどを得意する俳諧)や其角を継いだ形の沾徳の「譬喩(ひゆ) 風俳諧」(卑属な見立てや譬喩的表現を好み、本句取りなどのパロディ||揶揄・風刺などを狙う俳諧)が全盛の時代であった。巴人の俳諧は、この「洒落風・譬喩風俳諧」からスタートとして、晩年は芭蕉の「高悟帰俗」に近い「清高脱俗」

（潭北の『今の月日』の『（祇空）、巴人は心の芥を吐き盡し、泥に染まぬ蓮より潔よし』との境地、そして、それは蕪村の「離俗論」（俳諧の要諦は詩を語るべし）に繋がって行く）に通ずる深みのある観照の句が多くなって来る。しかし、「落あゆや水に酔ひたる息づかひ」（烏山落石地内の巴人句碑）の句もまた、「産卵のため赤黒い腹をした落ち鮎は酒でなく水に酔っている」とした譬喩俳諧風の「見立て」の面白さの句という鑑賞が、近現代の俳句の世界ではなく、「機知と笑いを根底に宿している近世俳諧」の鑑賞がより当を得た理解なのかも知れない（『蕪村の師巴人の全句を読む——『夜半亭発句帖』輪読——』所収「丸山一彦発言要旨」）。なお、潭北の『今の月日』には、「烏山八景句碑」の作者の「専吟・淡々（渭北）」についても触れている。



『夜半亭発句帖』の表紙と本文の一部



那須烏山市落石 巴人句碑

(管見5) この巴人奉納句が、「巴人」の号の初出であり(前号は「竹雨」)、翌年の篁影堂(注・沾州邸)の『晋其角先生出点百韻』(早野家蔵)で、連衆十五人(沾徳・沾州・栢十・湖十・貞佐、烏山の俳人、斟斗∥斟計と同一人か? 等)の中で最高得点を得ていることなどから、烏山天満宮に奉納したのは、巴人の立机(俳諧の宗匠になること)を祈願してのものであるうか(『下野俳諧史(中田亮著)』など)。潭北の句の初出は、宝永四年(一七〇七)の『類柑子』で、潭北の立机はその頃であろうか。俳諧系譜書『綾錦』に、「江戸(注・江戸)宗匠」として「湖十」と並列して記載されるのは、巴人が京都に移住した後の、享保十四年(一七三二)のことである。巴人が烏山滝田天満宮に奉納句を献じた頃は、未だ、潭北は、この句碑に見られる俳人達とは若干距離があったのではなからうか。潭北が、蕪村が生まれた年の享保元年(一七一六)に、「芭蕉復帰」の先鞭をつけた祇空と共に奥羽・下野・下総を遍歴した撰集が、潭北の『潮越(汐こし)』(享保二年刊)で、そこには、当時の烏山の俳人達(斟斗・夕全・索閑・翠戸・魚尺・流木・里杜・如弓など)との歌仙興行などが記されている。

この頃が、俳人としての潭北の絶頂期であろうか(ここには、露沾∥磐城平藩内藤家に連なる宋因門の大名俳人、冠里∥備中松山藩主・八代將軍吉宗の老中の其角門の大名俳人、其雫∥其角門の秋田藩一万石の家老などの当時の名だたる俳人達との歌仙興行の作品を残している)。晩年は、「庶民(農民)教化指導者」として、『民家分量記』・『野総茗話(注・茶話)』(この二著の「序」は徳川吉宗の側近・成島信遍が寄せている)などを著し、全国的にその名が知られている著名人でもある(蕪村は、巴人没後の秋か冬の頃奥羽行脚を決行するが、その背後には潭北の『潮越』に見られる俳人達との交遊ネットワークがあったことなのであろう)。

巴人は、寛保二年(一七四二)に六十七歳で、日本橋本石町の夜半亭で没した。遺骸は

浅草本願寺中の即随寺に葬られた（即随寺は関東大震災の後千葉県市川市に移転し、過去帳は有るが墓碑は不明である。なお、京都の俗称椿寺で知られている混陽山地蔵院に、巴人門の可焉が建立した墓碑が現存する）。潭北は、延享元年（一七四四）七月三日、六十八歳で（大田原市佐久山か？）没した。現存する墓は善念寺（那須烏山市）の渡辺家の墓域にある（法名は記されていない。後人の建碑なのであろうか？）。

（那須烏山市善念寺・常磐潭北墓）



（同上・放下僧・牧野家墓）



（京都市地藏院・早野巴人墓）



三 「烏山八景句碑」の深い謎

（管見6）赤穂義士の其角門（より正確には「其角に親炙している沾徳門」）の大高子葉は、

吉良邸へ討ち入った日（元禄十五年十二月十四日）以前に、俳書『二つの竹』（元禄十五年刊）を刊行している。この題名の由来は、謡曲「放下僧」の「こきりこの二つの竹の、代々を重ねてうち治まりたる御代かな」に由来があるという（『俳句忠臣蔵（復本一郎著）』）。この「放下僧」は、「曾我物語」・「望月」と併せ三大仇討ちの一つとして知られているが、この「放下僧」で名高い牧野家の墓が、常磐潭北の墓のある善念寺（那須烏山市金井）にある（「善念寺」ホームページ「歴史」）。ここで、宋屋の「杖の土」で書き留めて、現存する句碑の中にはない、幻の「牧野」の一句、「筑子（こきりこ）もまき野の藪は雉子の声」（烏山 勘計）と符合して来る。赤穂事件で赤穂城主が切腹し、浅野家が断絶したのは、元禄十四（一七〇一）年三月十四日、そして、その一年後の、元禄十五壬午（一七〇二）春に、巴人は烏山滝田天満宮に奉納句を献じた。とすると、これは、赤穂義士・子葉らが、「うち治まる」（討ち治まる）、そして、本懐を遂げて欲しいということ、この句の背後に潜ませているのではなからうか？

（管見7）徳川幕府は、政道批判などの凶書をたびたび発禁処分にした。「赤穂義臣伝」に関するものもその対象になった。それらの発禁本か自主規制本と考えられる、沾徳撰集『橋南』に、沾徳・子葉らの六吟による歌仙が収載されている。その沾徳の発句と表五句目（月の定座）の子葉の句は次のとおりである。

発句 うぐひすの朝日綱張（つなはる） 壁の穴 沾徳

五句目 湯あがりの耳は城下へ旅の月 子葉

この発句と「烏山八景句碑」の其角の「鶯の氷らぬ声や朝日山」、この五句目と「烏山八景句碑」の巴人の「水聞の耳の動きや家桜」とが措辞的に「本句取り」の感じでなくもない。また、子葉の句に、「日の恩やたちまち砕く厚氷」（其角の「氷らぬ」の措辞に類似？）や「日にやけていざ笑はれふ山ざくら」（子葉の「山桜」に対して巴人の「家桜」の措辞か？）

の句がある。そして、沾徳と子葉の歌仙の中の句は、元禄十四年三月の浅野内匠頭の切腹前のものに対して、「烏山八景句碑」の句は、浅野内匠頭の切腹後の、元禄十五年十二月の吉良邸討ち入り前の作ということになる。とすると、「烏山八景句碑」の巴人の句は、「吉良邸の情報収集役（子葉）の耳の動きは、湯上がり耳の耳のようにさっぱりして、大願成就の花の報せも間もなくあることだろう」とでもなるのであろうか？

（管見8）「烏山八景句碑」の渭北（淡々）の「花の夢こゝろはづかし五郎山」は、子葉らが切腹した後の、元禄十六年の七月に、烏山に来訪した時に、「宵闇の華に鞍なし五郎山」と全然別の句形で、その『安達太郎根』に収載されている。これは、子葉の切腹時の辞世の句の「梅でのむ茶屋もあるべし死出の山」を踏まえての改案なのではなからうか？



東京都両国橋児童遊園・子葉句碑



松山市興聖寺・子葉句碑

(管見9) 赤穂義士が切腹した翌年、改元して宝永元年(一七〇四)三月に、「時事謡曲狂歌禁止」の令が出る。それは、次のような狂歌が世を席捲していることと関係して来よう。

細川(注・細川家)の水の(注・水野)流れは清けれどただ大海(注・毛利守)の沖(注・松平家)ぞ濁れる

赤穂義士は、討ち入り後、細川家・水野家・毛利家・松平家の四家の大名に預けられ、そこで切腹することになる。この時、義士を厚遇したのが「細川家・水野家」で冷遇したのが「毛利家・松平家」ということで、これに對する強烈な風刺の狂歌が上記のものである。この狂歌と「烏山八景句碑」の、後代の人が誤刻したと思われる巴人の「水聞の水の動きや家桜」が、どことなく符合して来るような雰気でなくもない。「細川家の家紋」は「細川九曜」(江戸城中での記録に残る七件の刃傷事件の一つに關し、時の幕府が細川家に家紋の変更を命じたことに由来があるという極め付きの紋)で、「桜の紋」である。巴人・潭北の時代から幾星霜を経て、後代の人は「水聞の水の動きや家桜」の「家桜」を「家紋の桜」解して、この巴人の謎句の背後の意図を探ったようにも思われるのだが、それはもはや巴人の句の鑑賞いうよりも夢譚の世界のものなのであるうか？

(管見10) 夜半亭一世早野巴人は、この「烏山八景句碑」の句を烏山滝田天満宮に奉じて、それまの「竹雨」の号を「巴人」と改めた。それは俳諧宗匠としての独り立ちを意味するのであるう。そして後に、夜半亭二世となる谷口(後に与謝)蕪村は、師の巴人亡き後、寛保四年(一七四四)に、「宇都宮旦

帖」を編んで、そこで、それまでの「宰鳥」の号を「蕪村」と改めた。これまた、俳諧宗匠としての「蕪村」の誕生を意味するものであった。この蕪村の初歳旦帖に、当時、佐久

山で病に臥していた潭北はその門出を祝して、「春興」の部に一句を献じている。これは、巴人亡き後、全面的に蕪村を支援し続け潭北が、その蕪村の独り立ちを見届けて、同郷の無二の畏友巴人が築いた夜半亭俳諧が巴人から蕪村へ引き継がれて行くことを見届けたということを意味しよう。潭北もまた巴人共々、蕪村の師ということ特記して置く必要がある。

白くたつ梅の煙や方一里
梅がかや隣の娘嫁（か）せし後
しら梅に明（あく）る夜ばかりとなりけり

巴人（『夜半亭発句帖』）
潭北（『寛保四年宇都宮歳旦帖』）
蕪村（『から檜葉』「夜半翁終焉記」）



潭北と若き日の蕪村？蕪村
『新花摘』・月溪画



巴人像 = 右上、蕪村画・
几董書。几董『其雪影』

（鄧月泉巴人 後以巴人為庵号 更名宋阿
別号 夜半亭 啼ながら川こす蟬の日影哉）

第二 芭蕉没後の元禄俳壇と烏山八景句碑鑑賞

一 芭蕉没後の元禄俳壇の動向

芭蕉がその五十一年の偉大な生涯を閉じたのは元禄七年（一六九四）十月十二日のことであった。上方の旅に出ていた其角は、その前日の夕べに大阪に着いて、運命の奇遇であろうか師の臨終に侍した。芭蕉の遺骸は、遺言によつて淀川を川舟で近江の義仲寺に移し、ねんごろに葬った。

其角は師の牌位下で傷心の筆を執つて、その「終焉記」を書き『枯尾花』を編んだ。時に、三十四歳であった。其角が『枯尾花』を編んだということは、それがそのまま蕉門における彼の地位を示すものでもあった。年齢からすれば、素堂（五十三歳）、杉風（四十八歳）、曾良（四十六歳）、去来（四十四歳）、嵐雪（四十一歳）、許六（三十九歳）、越人（三十九歳）、そして、土芳（三十八歳）と其角よりも年配の方々が目白押しであるが、其角が蕉門第一の高弟であることは、その閱歴、そして、その力量からして周囲の誰からも認められるものであった。

しかし、芭蕉没後、蕉門はその統率者を失つて、同門間に対立や反目か生じ、やがては各自好むところに走つて分裂して行く。

江戸蕉門は、其角晩年の作風の「洒落風」を基調とするグループ（其角没後は、沾徳の「譬喩風」と合体して「江戸座」グループの主流と化して行く）、その其角グループと共に「江戸座」として交遊を継続している嵐雪グループ（後に、雪中庵三世・蓼太らの「雪門」グループ）、その二大グループと距離を置いている杉風グループ（後に、一世宗瑞らの「白

兔」グループ)、その他芭蕉直門(枳風・文麟・卜尺・利牛ら)と、四分五裂して行く。
この江戸蕉門に対して、田舎蕉門と称されている地方グループの、美濃派(支考)と伊勢派(涼風、涼菟、乙由||麦林舎)とは、芭蕉没後十年に当たる宝永元年(一七〇四)に『三匹猿』を刊行し、その提携が成り、「江戸座」グループの「奇抜・奇警」な見立てや趣向を重視する俳諧に比して、俗耳に入り易い「俗談平話」の「通俗平易」な句風を支考らが行脚する地方の隅々に拡大・浸透させて行く。

これらの江戸蕉門と田舎蕉門の他に、京都(去来・風国ら)、大阪(祇空・之道ら)、近江(許六・文草・洒堂ら)、尾張(越人・荷兮ら)、伊賀(土芳・桃隣ら)、三河(白雲ら)、加賀(北枝・凡兆ら)、越前(野坡)、越中(浪化ら)、そして、信濃(曾良)と、各地の蕉門は、江戸蕉門と田舎蕉門との二つの狭間にあつて、次第にその影を潜めて行く。

芭蕉がその絶頂期にあつたのは、元禄四年(一六九一)の、いわゆる「芭蕉七部集」の最高峰とされている『猿蓑』(去来ら編)が刊行された頃であろうか。そして、元禄から宝永と変わる頃(一七〇四)には、すなわち、元禄時代が終わった頃には、もはや、蕉門とこのは、芭蕉生存中とは似ても非なるものに変質してしまつたということであろう。

ここで、江戸蕉門を代表する「江戸座」(其角グループ)の俳人達について元禄十四年(一七〇一)に刊行された『蕉尾琴』(其角編)で紹介を置いて置きたい(「明治大学教養論集一 二八号」所収『蕉尾琴』に載る作家(今泉準一稿)を)。

A 大名あるいはこれに準ずるもの

行露(別名||冠里、備中松山藩主・安藤信友)、三嘯(伊予松山藩主・久松定直)、闡幽||せんゆう(信濃高島藩主・諏訪忠虎)、露江(磐城平藩主・内藤義孝)、玉芙(旗本・千石久治か)、龍尺(不詳・大名か旗本の本身)

B 家老あるいは藩士など

其雫（秋田藩家老・梅津忠昭）、谷羊（秋田藩士）、檀泉（秋田藩士）、入松（秋田藩士）、角枝（秋田藩士）、硯水（秋田藩士）、里東（膳所藩士）、野道（膳所藩士か）、潘川（膳所藩士か）、子葉（赤穂藩士・大高原吾）、竹平（赤穂藩士・神崎与五郎）、嘯山（伊予松山藩士・久松貞知）、周東（伊予松山藩士・青地伊織、但し、医官）、秋航（磐城平藩士か、松賀氏）、宣雨（幕臣か）

C 儒および医

亀毛（漢学者・梁田蛻巖Ⅱぜいん）、三弄（医または儒、人見必大）、午寂（医または儒、人見元浩）

D 僧尼

専吟（真言宗か）、心水（禅僧か）、日寿（尼）

E 俳諧点者かこれに近い俳諧師として知られているもの
沾徳、沾州、十丈、紫紅、琴風、円水、自悦、青峨、東潮

F 町人

大町（中西氏・伊勢屋七兵衛）、朝叟（石内氏）、百里（高野氏・魚問屋）、其齋（朝山氏・妓楼主か）、口遊（伊勢の人・商か）、秋色（商家の妻、後に点者）、序令（石内氏・魚問屋）、千調（南村氏・仙台の人・商か）、堤亭（下村氏・商か）

G その他

闇指（続猿蓑作家）、一鉄（三輪氏、宗因門の作家・江戸の人）、焉子（安藤家中の人）、月（安藤家中の人）、残香（炭俵、続猿蓑作家・美濃の人）、山峰（続猿蓑作家）、唄言（安藤家中の人）、白桜（安藤家中の人）、卜尺（小沢氏・蕉門）、卜宅（向日氏・蕉門）、毎閑（安藤家中の人）、利口（炭俵、続猿蓑作家）、立朝（安藤家中の人）、里圃（続猿蓑作家）、翁（芭蕉）、其角、東順（其角の父・故人）

注1 上記の太字の作家は「烏山八景句碑」に出てくる俳人
 注2 早野家蔵『晋其角先生出点百韻』に出て来る「烏山八景句碑」関係俳人（巴人・湖
 十・柏十・斟斗||斟計？）



『焦尾琴』其角編著・「自序」/早稲田大学図書館蔵



『焦尾琴』行露 = 冠里・備中松山藩主安藤信友・子葉 = 大高源吾・専吟・琴風の発句
 早稲田大学図書館蔵

二 「烏山八景句」が奉納された元禄十五年（一七〇二）前後の時代史的背景

元禄十四年（一七〇一）辛巳 其角四十一歳
 二月 先十二年の大火に消失した日記・句稿から思い出し、また知人の草稿をたよりに『焦

尾琴』を編む。風・雅・頌の三巻から成り、風の巻に知友の発句二百余、歌仙六卷、雅に発句二百及び歌仙七巻と文章一篇、頌に古麻恋句合を含む二百二十余句と五十韻・歌仙各一卷、文章等を収録する。

三月十四日 赤穂藩主浅野長矩、殿中にて吉良義央を傷つけ自刃を命ぜられる。

元禄十五年（一七〇二）壬午 其角四十二歳

二月二十五日 天満宮八百年御忌。

松梅やあがむる年も八百所 其角

亀戸天神社にて、詩歌連俳の興行あり。其角も一座す（『類柑子』『五元集』）。

三月刊記 轍士編『花見車』、俳人を遊女に見立てての品評の中、其角の一項あり。

春 巴人、野州烏山の滝田天満宮に其角・嵐雪その他の句とともに奉納する（『杖の土』）

五月十三日刊記 子葉編『二つの竹』発句一句入集。

八月十五日夜 英一蝶を偲んでの百韻、連衆、楓子・晋子 〓 其角・岩翁、暁白・大町・専吟・猶即・堤亭・昌貢・琴風・紫紅・反梅・止水・暁松・甘己（『類柑子』）。

十二月十四日 赤穂浪士、吉良邸討ち入り。大高源吾（俳号・子葉）・神崎与五郎（俳号・竹平）の句が『焦尾琴』に載っているので、其角も赤穂浪士のうち何人かを知っていたことが知られる。

元禄十六年（一七〇三）発末 其角四十三歳

二月四日 赤穂浪士自刃

万世のさえづり鸚唇（りしん）を転（ころが）し

黄舌（こうぜつ）をひるがへす

うぐいすにこの芥子酢（からしず）は涙かな 其角（『類柑子』『五元集』）

二月十日 赤穂浪士初七日。

追悼歌仙一卷。其角・応三・沾徳・周東・貞佐・堤亭（『類柑子』）。

三月四日 赤穂浪士初月忌。追善句会。沾徳亭に、午寂・横几・凍雲、角吁（かくう）、堵岩（とがん）出席（『類柑子』）。

七月十三日 菩提寺芝二本榎上行寺へ墓参の帰途、泉岳寺前を通り、赤穂浪士の知友らを佛に冥福を祈り、その感慨を「松の塵」と題して一文を草す（『類柑子』）。

十月二十一日 篁影会で催された百韻および歌仙に批点を加える。連衆、夕全・堤亭・沾徳・沾洲・甫盛・柏十・巴人・湖十・序令・吟松・白獅・貞佐・東潮・斟斗（穎原退蔵紹介『石楠』昭和五年五月号、池田俊郎「早野家蔵其角点巻紹介」『俳文藝』一一一）。

（『宝井其角全集年譜編』・『蕉門俳人年譜集（石川真弘編）』・『俳句辞典近世（松尾靖秋編）』）

其角が生存中に編んだ『焦尾琴』は、其角の絶頂期の撰集であるばかりではなく、これが刊行された元禄十四年（一七〇一）当時の、爛熟した元禄の江戸文化の一頂点を示すものと言っても決して過言ではなからう。これは「江戸文化」の、その「江戸」に在住する「士農工商」の身分階級を取っ払った「太平の世」の一典型を示すものと言えるものなのであろう。

『焦尾琴』は、其角が関係した俳諧（連句・発句・俳文）の、たまたま知友らが所持していた草稿などを基にして編んだもので、ほんの一部分に過ぎないものである。ここには、大名始め名だたる著名人が目白押しであるが、「十三才重宵」などの少年のものも収載されている。

其角の他の撰集などを見ていけば、この種の「老若男女」を問わず、其角の孫弟子（蕪村の師は其角の門弟巴人）に当たる蕪村の「俳諧に門戸なし。只是俳諧門といふを以て門とす」（『春泥句集』「蕪村序」）の、その具体例を目にすることが出来るであろう。

その一例に、上記の年譜の「元禄十六年（一七〇三）七月十三日」の、赤穂浪士の知友

らを佛に冥福を祈つての感慨の一文「松の塵」(『類柑子』)の、次の一節などが上げられよう。

「凡(およそ)人間のあだなる(かりそめなる)ことを観ずれば、我々の腹の中に尿と慾との外のものなし。五輪五体(五輪||地・水・火・風・空。五体||頭・首・胸・手・足。五輪五体||肉体・からだ)は人の体、何にへだてのあるべきや。(この後に、「公家も武士も百姓も町人も皆同じだ。この糞尿と欲望をかくすために冠をつけたり、刀を持つたり、袴を着けて馬に乗ったりしているに過ぎない」の意が続き、その後、「たらちね(母君)に借錢乞(借金を取り立てする)はなかりけり」の句を添えている)。」

この元禄文化が花咲いた太平の世に、「元禄赤穂事件」が勃発する。それは、元禄十四年(一七〇一)三月十四日の「赤穂藩主浅野長矩の切腹と赤穂藩の改易」(第一次事件)、元禄十五年(一七〇二)十二月十四日の「赤穂浪士の吉良良央邸討ち入りと仇討ち」(第二次事件)、そして、元禄十六年(一七〇三)二月四日の「赤穂浪士自刃」(第三次事件)との、この三つの事件とを内包している。

この第一次事件と第二次事件との狭間の、元禄十五年(一七〇二)の春に、巴人は「野州烏山の滝田天満宮に其角・嵐雪その他の句とともに奉納する」(『杖の土』)。

巴人が、何故、この年に、何故、この場所(滝田天満宮・滝田朝日観音堂)に、何の理由で奉納したのかは、全く謎のままなのである(皆川晃著『巴人来鳥の謎』・早野巴人顕彰実行委員会刊)。

これらに関して、上記の年譜の「元禄十五年(一七〇二)二月二十五日 天満宮八百年御忌」が大きく関係しているように思われる。この「天満宮八百年御忌」について、『類柑子』に次のような一文がある(『類柑子』中)。

「元禄十五壬午 ○聖廟八百年御忌 ○西行上人五百年忌 ○宗祇法師二百年忌 ○貞徳翁五十年 霜月十五日懷旧の心をのべ侍る。」

帯解（おびとき）も花たちばなの 昔哉 晋子

かの長頭丸（松永貞徳）のすがたにて昇殿ありし昔をいへる句也。夢想を祝し侍る会盟の事につけて才子文人筆を置かざるごとし。其名高き人の年忌に廻り合するも風俗おとろへず、飛梅のかるがる敷（しく）云出（いいだす）べきにあらずと

松梅やあがむる年も八百所 晋子

（亀井戸千句奉納発句略之）」

この文中の「西行上人五百年忌」は厳密には「五百十三回忌」、そして、宗祇は満二百年（二百一回忌）で、「概数かあるいは繰り下げて一緒に年忌を修めたものか」、また、「夢想を祝し侍る会盟の事」とは、天神社で祭日（二月十五日）の前夜に「夢想の会（え）」と呼んで俳諧の会があり、これを言っているのだらうとのこと、また、「飛梅かるがる敷（しく）」は、「飛梅やかろがるしくも神の春」（守武）の句を踏まえていること、等の指摘がある（明治大学教養論集九九号「所収「其角と冠付（今泉準一稿）」」）。

とにもかくにも、巴人が「野州烏山滝田天満宮」に其角・嵐雪らの句と共に自分の句を奉納した「元禄十五年」は、この「○聖廟八百年御忌 ○西行上人五百年忌 ○宗祇法師二百年忌 ○貞徳翁五十年」という記念すべき年に当たり、巴人の師の其角が、「野州烏山宮」に「千句奉納発句」を献じたことに起因して、巴人は自分の生まれ故郷の「野州烏山天満宮」に、師の其角の「俳諧の弥栄（いやさか）」を願っての奉納句を献じたことと軌を一にしているという思いがして来る。

すなわち、詩歌の神・菅原道真を祭っている「天満宮八百年」の記念すべき「元禄十五

年の春」に、「俳諧の弥栄（いやさか）」（一門の俳諧と己の俳諧の弥栄）を願ひ、師其角の奉納句の「松梅やあがむる年も八百所」の、「その「八百所」の一つの、産土の土地の「野州烏山滝田天満宮」に、師の「其角・嵐雪」の句と尊敬すべき先輩・同輩等（専吟・琴風・渭北・柏十・湖十等）の句と共に己の句も併せて奉納したのではなからうかということである。

このことに関連して、後に、巴人は、京都に移住していた頃の享保十八年（一七三三）に『一夜松』を刊行するが、それは「天津香も残るや雪の一夜松」の句と併せ、「北野天満宮」に奉納している。巴人と天満宮との関係は、その生涯の折節にその影を見て取ることができ、それは、やはり上記の其角の一文と深く関わっているように思えるのである。其角が、赤穂浪士関連の追悼句会を興行するのは、元禄十六年（一七〇三）二月四日の「赤穂浪士自刃」（第三事件）の後のことで、巴人が奉納句を献じた頃（第一次事件の後）は、其角はより多く三宅島に島流しの刑に処せられている畏友英一蝶の方に関心があったことであろう。

英一蝶（俳号Ⅱ暁雲・狂雲堂・夕廖）は、其角よりも年長で、絵画では其角の師匠であるが、俳諧の方では其角の弟子ということを自認している。その一蝶が、罪状不明のまま、元禄六年（一六九三）に入牢、そして、再び、元禄十一年（一六九八）に三宅島に島流しという刑に処せられる。その理由が、「為政者の風刺」「生類憐れみの令違反」「奢侈禁止令違反」「そそのかしの罪（親交のあった大名・高級武士を吉原遊びをさせて綱紀を乱したなど）」と、時の、將軍綱吉、そして、大老にまで上り詰める柳沢吉保の意向が強く働いた結果のものとして、時に流布されている。

そういう最中であって、其角は、「英一蝶を偲んでの百韻興行」を行っている。これは一歩踏み外せば、其角やこの百韻興行に参加している連衆は、英一蝶と同じ罪人に仕立てられるところのものであろう。そして、この連衆の中に、巴人の奉納句に出て来る、「専吟・

琴風」の名も出て来る。

ここで、この元禄十五年（一七〇二）に刊行された『花見車』（轍士著）で、元禄時代の俳壇状況を見て置きたい。この『花見車』には、三都（京都・大阪・江戸）及び諸国の点者（宗匠）、貞徳以下二百二十五人を全て遊女に見立てて、それぞれ郭言葉でその品定めをしている。

それによると、最高の「太夫」（上の点師）は三十一名で、この中で蕉門は、「芭蕉・其角・嵐雪・桃隣・諷竹Ⅱ之道・園女」の六名程度で、その勢力は、元禄俳壇の新派の少数派だったことが了知される。圧倒的に、旧派の貞門派と談林派がその主流を占めていたのである。

そして、巴人の奉納句の中の俳人では、「其角・嵐雪・専吟・琴風・渭北」の四名で、専吟は「たいこ女郎」（蕉門の雲水の僧で芭蕉に親しいが、芭蕉没後其角の付き添って点者扱いとなっているという意か）、渭北は「かぶろ」（遊郭の童女の意だが、若手の其角に付き添って点者扱いとなっているという意か）、「琴風」は「点者」の中ではなく、「勝名並びに編集之作者」の中で、「おこと」の「勝名」で出て来るが、「今は第一線の遊女（点者）ではない」という意なのであろう。

其角は、「松尾屋（蕉門）のうちにて第一の大夫也」と、嵐雪も「太夫」なのだが、「今は尼の姿となりていさんす」と、俳諧よりも禅の道に足を踏み入れているということなのであろう。

そして、この「花見車」に出て来ない、「柏十・湖十・巴人・斟計（斟斗か？）」は、まだ、遊女（点者・宗匠）として独り立ちしていないということなのであろう。

もう一つ、この元禄十五年（一七〇二年）には、当時、赤穂義士ではなく浪士の大高源五（俳号Ⅱ子葉）が『二つの竹』を刊行している。これは、子葉の遺稿集ともいうべきもので、その刊行以前の、この遺稿集の草稿の一部分のようなものは、子葉の所属する沾徳



亀戸天満宮・江戸
名所図絵巻之七



那須烏山市・烏山天満
宮・柄曲（つかまがり）
天神

門や、その門戸を同じくする其角門に置いては、容易に目にすることが出来たようにも理解できる。

この子葉の『二つの竹』の刊行は、その年の五月のことで、巴人が野州烏山滝田天満宮に奉納句を献じた、その年の春よりも後のことなのであるが、巴人の奉納句に出て来る俳人が、其角・沾徳に近い俳人の子葉らの赤穂浪士の現況を慮って、それを句の背後に偲ばせたということはあり得ることであろう。

しかし、これは副次的なことであって、巴人が奉納句を献じたのは、その年の二月二十五日の其角の「天満宮八百年御忌」の奉納句と同じように、「天満宮の俳諧の弥栄」と共に「一門と己の俳諧の弥栄」を祈念してのものと理解する方がより素直な見方であろう。これらの奉納句を以て、巴人は、これまでの「竹雨」という俳号を「巴人」と改号して、俳諧の道を生涯の道と定めたように思われるのである。

三 「鳥山八景句」 関連鑑賞

(一) はじめに(「鳥山八景句」の四つの句形)

元禄十五年(一七〇二)の春に、巴人が「野州鳥山滝田天満宮」に奉納したとされる「鳥山八景句」の句形・作者等については、それぞれ微妙に相違する下記の四つのものが今に残されている(句形については濁点のみ施し、読み・語釈などは次節以下ですることとする)。

① 宝永元年(一七〇四) 刊『安達太良根』(淡々||渭北編) ↓ 略号||「安」

鳥山に帰路をつけて 天神に参詣すれば
かたへに巴人が奉納 景を集め
はるを集めて 朝日つらつらもれり 句中に
所をこめたり

中川やほうり込んでも朧月
鶯や氷らぬ声を朝日山
独活蕨び妻木こる日や比丘尼山
赤だれに猿の手もがな底雲雀
宵闇の華に鞍なし五郎山

嵐雪
其角
専吟
琴風
渭北

水聞の耳の動きや家ざくら

巴人

②宝曆五年（一七五五）刊『杖の土』（宋屋編）↓略号Ⅱ「杖」

野州烏山滝田天満宮に往昔
亡師が奉納有 忝く爰に

題

朝日山 鶯の氷らぬこゑやあさ日やま 東武 其角

中川 中川やほほり込んでも朧月 嵐雪

比丘尼山 独活蕨つま木樵る日やびくに山 専吟

前垂山 赤だれに猿の手もがな庭雲雀 琴風

五郎山 花の夢こゝろはづかし五郎山 後名淡々 渭北

桜井里 水聞の耳のうごきや家ざくら 願主 巴人

牧野 筑子もまき野の藪は雉子の声 烏山 斟計（斟斗か）

右 元禄十五壬午 春

③寛政元年（一七八九）写「佐藤文書 桧山豊山写」↓略号「写」

（表紙）

下野国那須郡

瀧田村朝日観音江
奉納額写

桧山豊山

(本文)

滝田八景

朝日山 鶯の氷らぬ声や朝日山

中川 中川やほうりこんでも朧月

比丘尼山 独活蕨爪木こる日や比丘尼山

赤垂瀨 赤垂に猿の手ほしや底雲雀

五郎山 花の夢心恥かし五郎山

大沢 大沢や入日をかえず雉子の声

興野 その原や朧の月も興野(キヤウ)野山

桜井里 水聞の水の動きや家桜

其角

嵐雪

雪吟 (専吟の誤刻)

蓼風 (琴風の誤刻)

渭水 (渭北の誤刻)

栢十

湖十

巴人

右はじめ一篇の元禄の古しへ 巴人がもとめけるを 今はた当時の好人におなじ八景
を模さしめて 碑上にちりばめて 不朽に伝え侍るは 素由ならびに門人蓼太が趣意
なるを神田庵に知誌

其外

景色は都を笑ひ朝日山

中川や雪解を分る水の色

経を読む鳥を枝折や比丘尼山

行水や紅粉猪口洗ふ白椿

夜も香に花の兄見よ五郎山

存義

買明

楼川

百万

鶏口

(三句略)

右は元禄の頃 氏神に奉納有しが 星霜経り積みて いづれの頃にか 其額も朽失し
など院主のもの語り いとほいなく聞へ侍れば とみに諸士をかたらい 今爰に再興
するものは

拍手に明星白し梅の花

百艸舎 松吟

奉納四季

(十二句略)

寛政元己酉年十二月二十五日

④安政三年(一八五六)碑「烏山八景句碑」↓略号「碑」

安政三丙辰南呂再建

善哉庵永機書

烏山八景

朝日山 鶯の氷らぬ声や朝日山

中川 中川やほうりこんでも朧月

比丘尼山 独活蕨爪木こる日や比丘尼山

赤垂瀧 赤垂に猿の手ほしや底雲雀

其角

嵐雪

雪吟 (専吟の誤刻)

蓼風 (琴風の誤刻)

五郎山 花の夢心恥かし五郎山

大沢 大沢や入日をかえず雉子の声

興野 その原や朧の月も興野山

桜井里 水聞の水の動きや家桜

渭水（渭北の誤刻）

栢十

湖十

巴人

これらの四つの資料で、巴人が「野州烏山滝田天満宮」に奉納したものに最も近いものは、奉納後四十三年の時の経過はあるが、巴人の忠実な後継者の一人である宋屋が編んだ②の「杖」所収のものと思われる。淡々（渭北）の①の「安」所収のものは、「安」そのものが、芭蕉の『おくの細道』を模して、実と虚を織り交ぜての紀行文というスタイルで、②の「杖」と比較すると、自分の句を改作したり、其角の句と嵐雪との句を入れ替えたり、その種の改案をしているように思われる。

そして、これらの①の「安」と②の「杖」との中間にあつて、現在の句碑の④の「碑」の原形となっている③の「写」こそ、最も謎の深いものを秘めているように思われる。

この③の「写」に登場して来る「蓼太」は、雪中庵三世の大島蓼太で、その終焉記『藤衣』（天、七年刊）に「東西南北に吟行五十余度に及び、集を編むこと二百余部、文台許す輩四十余人、門人三千に余れり」と、蕪村の時代の天、俳壇を牛耳った元禄時代の其角に匹敵する俳諧宗匠である。

この蓼太は蕪村と旧知の間柄で、蕪村が亡くなった時に、その『から桧葉』に、「ことしはのぼれ、今年はのぼらんとおもふも、京師に此叟あればならし、あゝ夜半の我を哭しむるは夜半亭の主人」と前書きして、「ちからなき山の端（は）見たりおぼる月」の一句を手向けている。そして、『統一夜松』を編まんと江戸に下った几董に志を遂げしめ、夜半亭一世巴人、そして、夜半亭二世蕪村の後継者として、几董をして夜半亭三世を名乗らせた、

夜半亭俳諧とは縁の深い俳人でもある。

そして、この「存義」も「百万」も、夜半亭二世となる若き日の蕪村に連なる俳人なのである。存義は、馬場存義、別号、李井庵、有無庵、古来庵など、其角亡き後の江戸座宗匠として人気の高い宗匠であった。

次の「百万」もまた、蕪村に連なる俳人で、若くして、其角・嵐雪に傾倒して、其角の句集『五元集』『続五元集』、そして、嵐雪の『玄峰集』を編んだその人である。小栗氏、初号は其川、「百万坊」の「百万」と共に「旨原」の俳号を用いた。

ここで、元禄十五年（一七〇二）に巴人（夜半亭一世）が奉納した「杖」（そして「安」）のものは、「瀧田八景」と題して、「杖」の「斟計」の句「筑子もまき野の藪は雉子の声」を外して、新たに、「柏十」と「湖十」の句を加えたということなのではなからうか。

そして、その新たな奉納額は、蓼太が主導して、その時には、この八句の外に、「其外（そのほか）」として、「存義・百万」らの八句も、同じ奉納額に記したと解したい。

そして、安永七年（一七七八）に旨原（五十四歳）、天明二年（一七八二）に存義（八十一歳）、天明三年（一七八三）に蕪村（夜半亭二世）、天明七年（一七八七）に蓼太（七十歳）と亡くなって、寛政元年（一七八九）十月二十三日には、夜半亭三世の高井几董（享年四十九）が伊丹で急逝した。

この夜半亭三世几董が亡くなった報せが、遠く京都から野州烏山にも伝えられたのであろう。その十二月二十五日に、野州烏山の巴人（夜半亭一世）・蕪村（夜半亭二世）・几董（夜半亭三世）に連なる俳人達が、夜半亭三世几董の死を一つの契機として、夜半亭三世几董追悼というよりも、野州烏山が産土である巴人、そして、その夜半亭俳諧に思いを廻らせての懐旧の句会を興行し、その一部を「奉納四季」としてまとめ、これまでの、巴人が奉納し蓼太が手直しした「滝田八景」の八句とその時の「其外」の八句と併せ、「野州滝田村朝日観音」へ奉納したと理解をいたしたい。

さて、最後の、安政三年（一八五六）に石碑の形で現在の東江神社境内に建立した「烏山八景句碑」の「碑」であるが、これは巴人が奉納額を献じてから何と百五十四年の時の経過がある。そして、これは、そっくり寛政元年（一七八九）の「写」そのもので、その「滝田八景」を「烏山八景」に置き換えての、巴人の原形に蓼太が手直ししたと思われるものを、そのまま石碑にしたと解せられる。

この「碑」は、其角堂七世を嗣承した「善哉庵永機」の書である。徳積氏。通称は善之、号は老鼠堂。父六世其角堂鼠肝に俳諧を学び、其角堂七世を嗣承した。芭蕉二百回忌法要を営み、『元禄明治枯尾花』を刊行。『其角全集』『芭蕉全集』『支考全集』『芭蕉十哲集』等の編著がある。明治三十七年（一九〇四）歿、八十二歳の生涯であった。

其角堂七世永機が、この石碑の書を認めたのは、一世湖十との縁に因るであろう（一世湖十系統の深川座は、永機の頃から、湖十を名乗る深川座と其角堂を名乗る其角座と二派に分かれ、この其角堂系統は平成の今日まで続いているようである）。

ちなみに、夜半亭の庵号も『烏山町史』に因ると、一世巴人↓二世蕪村↓三世几董↓四世閑空↓五世可董↓六世金仙↓七世素行↓八世薫江と続き、この京都知恩院の管長を務めた八世薫江から烏山の六世水と続くかのような記載がある。この六世水と「碑」の建立の願主の大鐘新斗とはどういう関係にあるのか、また、「杖」に出て来る「斟計・斟斗」と「新斗・葩水」とはどういう関係にあるのか等の検討・考察が必要となって来る（遡って、一世湖十の妻（俳号「花千」）は雪中庵二世吏登の姉で、この雪中庵二世吏登から雪中庵を引き継いだのが大島蓼太である。この雪中庵三世蓼太が、先に触れたとおり、現在の「其角・嵐雪・専吟・琴風・柏十・湖十・巴人」の八名の句による「烏山八景」の句碑の原形に大きくかかわっているように思われ、これまた、蓼太時代の烏山俳壇と雪中庵三世蓼太との検討・考察も必要となって来るであろう）。

なお、③の「写」の本文中、「素由ならびに門人蓼太」の「素由」について、地元、野州

鳥山の俳人、柳素由との指摘がある（皆川晃著『巴人来鳥の謎』）。この柳素由については、当時の鳥山の「町年寄筆頭をつとめる太右衛門」で、「造酒業も営み、また、米穀商を兼ね」、「俳諧を好み、江戸の宗匠との交遊も盛んに行っていた」という（皆川晃著『からすやま文学の碑散歩道』）。亡くなったのは寛政七年（一七九五）で、蓼太が亡くなった天明七年（一七八七）と対比して、同時代の人と言って差し支えなからう。この柳素由と「鳥山八景句碑」との係わりなども今後の検討・考察の課題の一つであろう。

鳥山八景句碑・拓影・字体と読み



鳥 山 八 景

鷗乃氷らぬ聲や朝日山
 中川やほう里込んても臘月
 独活蕨爪木こる日や比丘尼山
 赤垂尔猿の手本しや底雲雀
 花の夢こ、路恥し五ろや万
 大澤や入日を返すきしの声
 その原や臘の月も興野山
 水閉能水の動や家桜

其角
 嵐雪
 雪吟
 夢風
 渭水
 柏十
 湖十
 巴人

（鳥山八景句碑・拓影）『からすやま文学の碑散歩道』皆川晃著

(二) 其角の句鑑賞

- 鶯や氷らぬ声を朝日山 「安」
○ 鶯の氷らぬこゑやあさ日やま 「杖」
○ 鶯の氷らぬ声や朝日山 「写」「碑」

『五元集』（旨原編）では、「鶯や氷らぬ声をあさ日山」、「其角発句集」（其角著・坎窩久蔵考訂）では、「鶯やこほらぬ声を朝日山」の句形で収載され、どちらにも、「茶臼にとまりたる晝に」の前書きが付してある。この二著からすると、「鶯や氷らぬ声を朝日山」の「安」の句形が原形であることと、この二著の前書きからして画賛の遊興的且つ即興的な句と解すべきなのであろう。

前書きの「茶臼」は、「葉茶をひいて抹茶にするための石臼」のこと。そして、その石臼は、山城国（現在の京都府の中・南部）宇治朝日山の石製が良とされている。そこから、この下五の「朝日山」が連想されてのものと解せられる。さらに、「茶臼」は、隠語で、「上下逆になること。特に、男女交合で女性が上になる体位」に使われる。洒落と機知と難解な謎句の術学的作風を好む遊蕩俳人・其角の、この遊興的・即興的な句も、この隠語などを背後に利かせた、一種の艶句（破礼句）の雰囲気でもなくもない。

しかし、その前書きの「茶臼」などと離れて、掲句の一般的な鑑賞は、「鶯」（三春）の句で、それが、「朝日山で」（「朝日山」と「朝日が射す山」とが掛けられている）、「氷らぬ声」を、まだ、寒い季節なのに、「春告鳥（はるつげどり）」らしく、初春を告げている、

ここで、これらの「鳥山八景句碑」関連の句は、元禄十五年（一七〇二）の春に、当時

二十七歳の其角・嵐雪門の俳人早野巴人が、生まれ故郷の那須烏山に錦を飾って、地元の「滝田天満宮」に、これらの句を奉納したとされる（宋屋著『杖の土』）、その時代史的な背景で見て行くと、いわゆる、その前年に起きた「元禄赤穂事件」がクローズアップされてくる。

すなわち、その前年の三月十四日に、播磨赤穂藩主の浅野長矩（内匠頭）が、高家旗本・吉良義央（上野介）に対して江戸城殿中において刃傷に及び、浅野長矩は殿中抜刀の罪で即日切腹となり赤穂藩は改易となった。そして、その翌十五年（一七〇二）十二月十四日に、遺臣である大石良雄（内蔵助）以下、赤穂浪士四十七士が、吉良屋敷に討ち入り、吉良義央を家人や警護の者もろとも殺害した。そして、その赤穂浪士四十七士は、その翌十六年（一七〇三）二月四日に全員切腹されたという、その一連の事件が、直接、間接とを問わずこれらの句の背景にあるように思われるのである。

これらのことに関して、『五元集』などの、次の前書き（漢文の読みは『古典文学大系本』に因る）を付した其角の句などが参考となる。

故赤穂城主浅野少府ノ監長矩之旧臣大石内蔵之助等四十六人、同志異体ニシテ報（ムクユ）亡君之讐（カタキ）。今茲（ココニ）二月四日、官裁下り令一時伏刃（ヤイパニフシテ）斉屍（カバネヲヒトシクセシム）。万世のさえづり黄舌をひるがへし、肺肝を
つらぬく。

うぐひすに此（この）芥子酢はなみだ哉

この其角の句は、其角の「二月十日」の日付のある書簡（『俳句忠臣蔵（復本一 郎著）』

紹介『蕉影余韻（伊藤松宇編）』掲載懐紙）があつて、元禄十六年（一七〇三）二月十日、すなわち、義士の切腹からわずか七日目のものと解せられる。

そして、この前書きの漢文体のものは、時の大学頭の林信篤の事件の概要を述べた部分とのことで、続く、和文体のものは、『文選』所収「三良詩」の「黄鳥タメニ悲鳴ス、哀シイ哉、肺肝ヲ傷（ヤブ）ル」（殉死という無理に強いられた三人の善良な臣のむごさとその死を素朴に悲しんでいる詩の一節）を踏まえてのものなのである（『元禄俳人室井其角（今泉準一著）』）。

そして、この其角の句は、宝永二年（一七〇五）に刊行された沾徳撰『橋南』（自主規制の発禁本と解されている）の中にも収載されている。その『橋南』には、其角に親炙している沾徳門の切腹した義士俳人達（子葉・春帆、竹平、涓泉など）への一周忌の追悼の句が三十三句収載されていて、其角の句もその中の一句で、その前書きと冒頭の六句は次のとおりである。

君臣塩梅しれる人は誰。子葉、春帆、竹平、涓泉等也。

なきあとも猶塩梅の芽独活哉	沾徳
うぐひすに此芥子酢はなみだ哉	其角
枝葉迄なごりの霜のひかり哉	沾洲
ちるはなは皆男にてなみだかな	（宣雨）
落着に人を泣かせてたまつばき	暁松
その骨の名は空にある雲雀哉	貞佐

この前書きの「塩梅」の「塩」は、義士に関連する「赤穂塩」がイメージされている

のであろう。そして、「子葉」は大高原吾、「春帆」は富森助右衛門、「竹平」は神崎与五郎、「涓泉」は萱野重実（通称・三平）の俳号で、いずれも、其角系の沾徳門の俳人達である。さらに、上記の一句目（沾徳）と二句目（其角）の句は、子葉が切腹する前年の年に刊行した撰集『二つの竹』所収の、次の子葉の句を踏まえてのものである。

初鯉江戸のからしは四季の汁

子葉

この子葉の句には、「卯月の筍（たかんな）、葉月の松茸、豆腐は四季の雪なりと、都心の物自慢に、了我（注・江戸の俳人貞佐）さへ精進物の立（たち）かたになれば、東潮（注・江戸の俳人）、仙水（注・江戸の俳人）等とうなづきて」との前書きがある。すなわち、この前書きの「（京都では）豆腐が四季の雪」だと江戸の俳人達がお認めになったが、それと対比すると「（江戸では）からし汁が四季の汁」で、その「からし」で、「初鯉」を賞味するのが、江戸の醍醐味だという句意なのであろう。

その子葉の句を踏まえて、上記の一句目（沾徳）と二句目（其角）の句が、子葉の一周忌の追悼の挨拶句なのであろう。そして、この其角の句には、嘗て、其角と親交のあった画人・英一蝶（俳号・暁雲）が、元禄十一年（一六九八）に、「諸侯の放蕩浪費に先達する不逞の輩」として、時の悪政の象徴たる「生類憐れみの令違反」（町人の分際で釣りを行った）《武士は修練目的として黙認されていた》など真相不明の罪名を着せられて、三宅島へ流罪となった頃の、其角と一蝶の句と流布されている、次の相互の挨拶句なども、その背景にあるのであろう（『本朝画人伝（村松梢風著）』所収「英一蝶」）。

初松魚（かつお）からしもなくて泪かな 一蝶の贈句
其のからしきいて泪の松魚かな 基角の答句

さらに、『橋南』には、嘗て、赤穂事件勃発前の天下太平の頃の、すなわち、赤穂藩士であった頃の、子葉・春帆・涓泉が連衆になつてゐる歌仙も収載されている（その表の六句は次のとおりである）。

発句 うぐひすや朝日綱張（はる）壁の穴

脇 辛夷が覗く溪の奥行

第三 滝の淀春ずれるほど広どりて

四 振（ふるい）はじめは傘持が袖

五 湯あがりの耳は城下へ城の月

折端 いやがるものを裏で踊らす

沾徳

香山

春帆（富森氏）

子葉（大高氏）

涓泉（菅野氏）

ここで、現存する烏山八景句碑の八句のうち、少なくとも、次の四句については、それに交響しあつてゐる、すなわち、挨拶句のような、そんな雰囲気を有してゐるよう思われるのである（それらの四句について、ここに並列して掲載をして置きたい）。

鶯の水らぬ声や朝日山

うぐひすに此（この）芥子酢はなみだ哉

うぐひすや朝日綱張（はる）壁の穴

其角（「烏山八景句碑」）

其角（『五元集』『橋南』など）

沾徳（『橋南』）

独活蕨爪木こる日や比丘尼山

なきあとも猶塩梅の芽独活哉

雪吟（専吟の誤刻、「烏山八景句碑」）

沾徳（『橋南』）



其角画像・早稲田大学図書館蔵



其角と子葉 = 大高源吾・「両国橋の別れ」 = 「松浦の太鼓」

赤垂に猿の手ほしや庭雲雀
 その骨の名は空にある雲雀哉
 水聞の水の動きや家桜
 水聞の耳の動きや家桜
 湯あがりの耳は城下へ城の月

貞佐 (『橋南』)
 巴人 (『烏山八景句碑』の現在の句形)
 巴人 (『烏山八景句碑』、「杖の土」の句形)
 子葉 (『橋南』)
 蓼風 (琴風の誤刻、「烏山八景句碑」)

(三) 嵐雪の句鑑賞

- 中川やほほり込んで 臙月 「安」「碑」「写」
○ 中川やほほり込んで 臙月 「杖」

嵐雪は其角と並んで、蕉門門下の双壁であり芭蕉の弟子の中では最古参に属する。嵐雪が芭蕉に入門したのは、其角よりやや遅れているが、殆ど差はない（其角の芭蕉入門は延宝二年（一六七四）の十四歳の頃、嵐雪も同じ頃で、二十一歳の頃。年齢差は嵐雪が其角より七歳上である。ちなみに、芭蕉は嵐雪より十歳年上である）。

ともに芭蕉の無名時代からの弟子である。嵐雪は下級武士出身で、若いころ武家奉公をしていた（其角は芭蕉と親交のあった医家の出で、其角も医学について学んでいる）。二世市川団十郎（俳号||栢莖・三升・才牛）は『老いの楽しみ』の中で、嵐雪は「どらにて」と書き、破笠ともども、其角のところへ転がり込み、「其角、嵐雪、破笠は、夜具のない道楽な暮らしをしていた」と書いている。また、「嵐雪なども、俳諧以外の普段は、芭蕉をはずして逃げなどしていた」とも書いている。

しかし、芭蕉は其角と嵐雪とを重んじて、芭蕉の元禄五年の句に、「草庵に桃桜あり、門人にキ角・嵐雪有」との前書きを付して、「両手に桃と桜や草の餅」という句を作っている（『桃の実』）。

其角と嵐雪などの作風などの違いについては、「花やかなる事其角に及ばず、からびたる事嵐雪に及ばず、ほどけたる事支考に及ばず、閑（しずか）なる事丈草に及ばず、かるき事野坡に及ばず、実なる事去来に及ばず」（桃鏡編・蓼太跋『去来湖東問答』）などが参考になろう。

「からび」というのは、「枯淡な表現」のような意で、其角の「花(華)やかさ・洒落・奇抜・難解」など作風などに対して「滋味・苦渋・寂・穩健・平明」などの作風の違いなどが浮かび上がって来よう。

しかし、掲出の「中川」の句は、どちらかというところ、其角の「洒落」風な句で、作家的な洒落や遊戯性が目立つ句の方に入るのである。この句は、「朧月」という前書きを付して、『玄峰集』（旨原編）に収載されている。「朧月」は三春の季題。この句は、「空に掛かっている朧月」は「川に入れても朧月の朧を流してきれいなにならない」というよう、やはり、「洒落・比喩」風の見立ての面白さを狙っている句ということになる。

この句は、嵐雪の持ち味の自然観照の深さや滋味な作風などとは無縁の世界のものである。これは、この句を選句して奉納句とした巴人の、この選句の際の傾向と好みに因るものであって、巴人の狙いは、「嵐雪らしき」の句などではなく、「中川」という地名と「朧月」の見立ての面白さと、もう一つ、これらの句の背後に、例えば、斟斗（斟計？）の「筑子もまき野々藪は雉子の声」の「放下僧」に関連しての「赤穂事件」などを絡ませて謎句仕立ての鑑賞が許容されるような、そういう句を選句したように思えるのである。

中川やほうり込んでも朧月

筑子もまき野々藪は雉子の声

嵐雪

斟斗（斟計？）

この嵐雪の一句だけでは、単なる「中川と朧月」だけの句である。これが斟斗（斟計？）の句と並列すると、「筑子（こきりこ）の「放下僧」と関連して来て、さらに、子葉の生前に刊行した最後の撰集『二つの竹』にとイメージが拡がって、「赤穂事件」と結びついて来るといふ、そのイメージの拡がりの面白さである。もとより嵐雪は其角と違って、世相風刺の人事句などを得意とする俳人ではなく、そして、「元禄赤穂事件」が起きた元禄十

四年（一七〇一）当時は、その年譜を見ると「俳諧をや、離れ、禅道に励んでいたことが窺える」（『蕉門俳人年譜集（石川真弘編）』所収「服部嵐雪」「元禄十五年の轍士の『花見車』の嵐雪評」など）のである。

このことと関連するのかどうか、元禄十五年（一七〇二）、元禄十六年（一七〇三）にかけての、其角や沾徳が主宰した「赤穂義士」関連の追悼句会での歌仙や発句の中には、嵐雪の名は見られない。

ここで、上記の二句並列した場合の嵐雪の句の「中川」について、一句だけでは、「江戸名所図絵」に出て来る、武蔵（現在の東京・埼玉）の「中川船番所」辺りのイメージだが、二句並列すると、二句目の「筑子（こきりこ）」の野州烏山の「放下僧」の里のイメージと重なって、野州烏山を象徴するような「那珂川」のイメージと変身して来よう。

そして、この「朧月」の背景には、仇討ちものの「放下僧」との関連で、これらの句が奉納された元禄十五年（一七〇二）の一年前の「赤穂事件」の発端の、「赤穂藩主・浅野長矩（内匠頭）が、高家旗本・吉良義央（上野介）を江戸城殿中で刃傷に及び、殿中抜刀の罪で即日切腹となり赤穂藩は改易となった」、その真相が全く「朧」で分からないというイメージと結びついて来るであろう。

巴人が、どういう理由で、これらの奉納句を生まれ故郷の那須烏山の滝田天満宮に献じたのかは不明である。考えられるのは、この奉納句以前は、「竹雨」の号で、この奉納句から「巴人」の号を使用しているのので、いわゆる、宗匠としての「立机」とまではいかなくとも、それに類するようなことで独り立ちする、そんなこと祈願してのものなのかも知れない。ちなみに、撰集に収載されている巴人の最も早い作品は、その前年の元禄十四年（一七〇一）刊の『杜撰集』（嵐雪著）で、竹雨の号での次の前書きのある一句である。

嵐雪の跡を追て

巢の中を立得ぬ鳥や花の山



其角遺稿集『類柑子下』・早稲田大学図書館

竹雨



『類柑子下』・早稲田大学図書館蔵・「専吟・巴人の其角追悼句」

(四) 専吟の句鑑賞

- 独活蕨び (ママ) 爪木こる日や比丘尼山
- 独活蕨つま木樵日やびくに山
- 独活わらび爪木こる日や比丘尼山

「安」
「杖」
「写」
「碑」

其角が没したのは宝永四年（一七〇七）二月三十日に没した。享年四十七と五十歳に満たない生涯であった。其角の遺稿集は『類柑子（上・中・下）』（沾洲・秋色・青流）で、「晋子終焉記」（青流＝祇空）と諸家追悼吟とが、その下巻に収められている。この諸家追悼吟の中で、「烏山八景句碑」の作者のものは、次のとおりである。

中陰廻向

晋化（ふけ）去りぬ匂ひ残りて花の雲

嵐雪

亡跡

菜の花や坊が灰まく果（はて）はみな

ゝ

三七日

鶯や弓にとまりて法（のり）の声

ゝ

墓参

山ぶきの実を穴掘の鋤ひとつ

ゝ

斎をまぶく

榎壳（しきみうり）あなうの花の食を見る

ゝ

川骨や撥に凋（しぼれ）る夜半樂

ゝ

径の偈（げ）は連歌ときゝぬほとゝぎす

ゝ

風流をたてぬきの飛花を惜む

風体をたてぬきの飛花を惜む

専吟

孤房を探る

かうばしき骨や新茶の雲の色

巴人

茶に耽りて師にたがふをうらむ

今はなし咲来る花も無念なり

渭北

類柑子追悼（注・再板本の追記）

花見れば鳥聞けば実（げに）それよりは

琴風

白なれど香こそ長者の大桜

カラス山

潭北

湖十は諸国行脚中で、この「諸家追悼吟」の中にはその名は見られないが、其角七回忌追善に『二つのきれ』を編み、追悼吟を献じている。

粘鮫の落（おち）てぞ水にうき椿

湖十

柏十も、『類柑子』には追悼吟は見られないが、淡々が編んだ『其角一周忌』の中に、琴風と共にその追悼吟が見られる。

角もじのいろはにほへとすぐろ哉

琴風

風吹夜剃（そり）おろしてぞ花の法

柏十

専吟は、其角との関係では、其角門というよりも芭蕉直門の兄弟弟子という関係にある。芭蕉が専吟に贈った餞別吟（元禄六年作）がある。

鶴（つる）の毛の黒き衣や花の雲

ばせを（『句選拾遺』）

その「僧専吟餞別之詞」は次のとおりである。

「杖頭（じようとう）に草鞋をかけて、笠の内に名をあらはす。元禄六（む）とせ弥生の初（はじめ）、僧専吟、武江の東、深川の艸扉（そうひ）を開（ひらき）て、「既（すで）に一步をはじむ」と書く。此（この）僧常に風情を好み、市を避けて、年々斗藪（とそう）行脚の身となる。ことし又伊勢・熊野に詣（もうで）むとす。身は雲外の鶴にひとしく、流（ながれ）に嘴（くちばし）をすゝぎ、千尋の岡に翔（つばさ）をふるふて、野に伏（ふし）、雲に泊（とも）らん、胸中の塵いさぎよし。予、葎（むぐら）の交（まじわり）をなす事久し。今此（この）別（わかれ）にのぞみ、ともに岸上に立（たち）て、箱根山はるかに見やる。「彼（かの）白雲のたは（わ）める処こそ、旅愁の嶮難（けんなん）さがしきちまたなるべけれ。君かならず首（こうべ）をめぐらせて見よ。われ又此（この）岸上に立（たた）ん」といひて袂（たもと）をわかちぬ。」

芭蕉の深川庵の近くに住み、芭蕉と同じように「市を避けて、年々斗藪（とそう）行脚の身」の隠遁雲水の僧という趣である。芭蕉没後は其角の身辺にあつて良き俳諧の理解者でもあつたのであろう。

其角の周辺には、一方では大名級の身分の高い連衆が居るかと思ふと、この専吟のように隠遁雲水の僧などが、何の距てもなく座を一緒にしているといふことであらう。

さて、この句は、「独活」（晩春）と「蕨」（仲春）とが季題で、「独活蕨」と一緒になつての用例である。「爪木」は、薪にするための小枝・たきぎのこと。「こる」（樵る）は、立ち木や枝を切る・伐採すること。「比丘尼」は、出家して戒を受けた女性・尼僧のこと。ここでは、「比丘尼山」という山の名称なのであろう。

句意は、「訪ねて来る友のため）比丘尼山へたおもてなし用の独活と蕨と薪を取りに行く。（心弾むことよ）」位の意であらう。この句に何か隠されている意があるとしたら、下五の「比丘尼山」の「比丘尼」であらう。

もとより、専吟のこの句には、前年に起きた「元禄赤穂事件の「赤穂藩主浅野浅野長矩の切腹と改易」(第一次事件)とは無縁のものである。しかし、それと結びつけて、浅野長矩の妻・阿久里、落飾して瑤泉院(ようぜいりん)との、いわゆる、討ち入り直前に赤穂藩家老の大石良雄が赤坂・南部坂の瑤泉院のもとに赴くという「南部坂雪の別れ」などをイメージすることは可能であろう。

そして、それは、この句の作者専吟の意図というよりも、この句を選句した、巴人の意図に因るものが多いことであろう。はたして、巴人が、そういうことを意図して、この句を選句したのかどうかは謎であるが、この句もまた、巴人が奉納した「杖」の七句のうち、その七句目の、「筑子もまき野、藪は雉子の声」・斟斗(斟計?)の句に起因するということになる。



其角遺稿集『類柑子下』・早稲田大学図書館



『類柑子下』
早稲田大学図書館蔵
専吟・巴人の其角追悼句

(五) 琴風の句鑑賞

- 赤だれに猿の手もがな底雲雀 「安」
- 赤だれに猿の手もがな庭雲雀 「杖」
- 赤垂に猿の手ほしや底雲雀 「写」「碑」

其角は、元禄十一年（一六九八）十二月十日の火災で、貞享元年（一六八四）以来の句稿や日記の類を全て消失してしまった。その消失してしまったものを、知友や門人が所持しているものを足掛かりして、編集したものが『焦尾琴』（元禄十四年刊、この年始めて「半面美人」の点印を使用）である。

この『焦尾琴』に出て来る作者層は、大名（露沾、行露、冠里、露江、露沾の弟ら）、旗本（午寂、玉芙、宣雨ら）、藩士（其雫、肅山ら）などの武家・儒官階級、そして、それ以外の作者として、其角門（秋色、青流、堤亭、格枝、紫紅、貞佐ら）、嵐雪門（百里、朝叟、甫盛ら）、沾徳門（沾洲、仙鶴ら）、そして、蕉門（専吟、琴風ら）と、当時の其角の交遊関係が浮き彫りとなって来る（『宝井其角全集』所収「焦尾琴」「類柑子」解題など）。

この琴風も、専吟と同じように芭蕉直門で、芭蕉没後、其角門に出入りしている其角とは兄弟弟子ということになる。次の芭蕉の句には、「不卜一周忌 琴風興行」とあり、琴風が興行した句会でのものなのであろう。

ほととぎす鳴く音（ね）や古き硯ばこ 芭蕉 『陸奥衛』

琴風は、柳川氏。寛文七年（一六六七）の生まれで摂津東成郡（大阪府）の人。享保十一年（一七二六）二月七日没、六十才。元禄四年（一六九一）に『俳諧瓜作』を編んだ。姓

は別に生玉（いくたま）、河東。別号に絮蘿架（じよらか）、白鷓（はっこく）堂。編著はほかに『豊牛鼻（とようしはな）』など。晩年は内藤露沾公に近い俳人であった。

また、其角の『焦尾琴』の「早船の記」に、「一日琴風亭にあそんで、二挺（にちよう）こぐ船の時となく行（ゆき）かへるを見るに（以下略）」の長文を付して、「其角・百里・江蓁・午寂・甫盛・朝叟・楓子・白獅・新真」の句が収載されている。これらの俳人が「一日琴風亭に遊んで」ということで、専吟が雲水の行脚僧という侘び住まいの遊俳（俳諧を業としない俳人）とするならば、かなり裕福な環境下にあった遊俳という雰囲気である。さて、上記の「杖」の句には、「前垂山」という題が付してある。この「前垂山」の「前垂（まえだれ）」に対しての「赤だれ」で、かなり技巧的な句作りでもある。また、この「杖」では、下五が「庭雲雀」なのに対して、他の「安」「写」「碑」とも「底雲雀」で、この下五は「庭雲雀」なのか「底雲雀」なのかも問題となつて来る。

「雲雀」は三春の季題で、子季題として、「揚げ雲雀」「落ち雲雀」「初雲雀」「朝雲雀」「夕雲雀」などがある。「底雲雀」というのは「落ち雲雀」と同じように解せられる。それに対して、「庭雲雀」というのは、「野雲雀」（野に巢を作っている雲雀）でなく、「庭雲雀」（庭に巢を作っている雲雀）のような意なのであろうか。

「前垂（だれ）」は前掛けのこと。「赤垂れ」は「赤前垂れ」のことで、宿屋・料理屋・茶屋などの接客の女の人がつけた赤い前垂れ。また、それをつけた女の人（女中など）を指す。

「もがな」は欲しい。「猿の手もがな」は、「猿の手も欲しい」というようなことで、「猫の手も借りたい」の意の「（赤い尻した）猿の手も借りたい」のようなことであらうか。

とすると、この句の原形は、「杖」のもので、その下五は、「赤だれに猿の手もがな庭雲雀」の「庭雲雀」と解すべきなのであろう。

句意は、「赤前垂れを掛けた女中さんが、猫ではなく、赤い前掛けのような赤い尻をした

猿の手も借りたいほど忙しく働いている。その庭先では雲雀が長閑に鳴いている」というようなことであろう。

それが、「安」「写」「碑」では、「鳥山八景」「滝田村八景」に関連して「赤垂れ淵」の句と解して、その深い「赤垂れ淵」に「雲雀」が落ちていく感じの「底雲雀」という見立ての句としたような感じである。この場合の「猿の手もがな」または「猿の手ほしや」は、その「落ち雲雀」を「揚げ雲雀」にするには、「猿の手ほしや（もがな）」というようになるとであろうか。

どちらにしろ、この句は相当に技巧を駆使した句で、また、相当に謎句的な滑稽句の雰囲気を有している。ここで、「聞（きき）句」（聞発句）・「謎句」などについて触れて置きたい。

【聞句（ききく）・聞発句（ききほつく）】「是は謎の句にて思惟すればよく聞（きこ）ゆるなり。聞発句ともいへり。闇の夜は松原ばかり月夜かな、嗅（かい）で見よ何の香もなし梅の花、などといふ類（たぐい）なり。」（早川丈石著『誹諧名目抄』）

ここで引用されている例の「闇の夜は松原ばかり月夜かな」は、「闇の夜は松原ばかり／月夜かな」と「ばかり」で切り、「闇の夜は松原ばかりにて、そこを抜け出すと月夜になる」という類で、「句の切り方・『てにをは』の取り方によって意味が通ずる」のような句を「聞句」（謎を含んでいる句）というようなことである（『去来抄』）。

次の「嗅（かい）で見よ何の香もなし梅の花」は、「嗅（かい）で見よ／（この花にくらべれば）何の香もなし梅の花」と、この（この花にくらべれば）が「抜け」（ぬき体・ぬき句）となっているような例である。

こういう「謎句」・「聞句」・「ぬき句」などは、「俳句」の世界よりも「川柳」の世界で多

用されるもので、「地口・駄洒落」・「掛詞・縁語・譬喩的な技巧」・「擬人法・擬物法」などと結びついている。「言葉遊戯」の世界でもある。

其角らの「洒落風俳諧」、あるいは、沾徳らの「譬喩風俳諧」というのは、「奇抜・奇計の見立てや趣向を第一として、機知・機智的な謎句仕立ての句作り」、あるいは、「卑属な見立てや譬喩的表現を好み、本句取りのパロディ⇨揶揄・風刺などを狙う句作り」を得意とするという風潮を有していたと言うこともできよう。

掲出の琴風の句、題が「前垂山」で、その「前垂れ」から「赤垂れ」を持って来て、その「赤垂れ」から、「赤垂れ前掛けの女中さん」に見立てて、「猫の手も借りたい」から「猿の手も借りたい」と、巴人が奉納したこれらの句のうちでは、巴人の句と並んで、其角の「洒落風俳諧」の見本のような俳諧師という印象を強くする。

なお、この琴風の句を「元禄赤穂事件」と結びつけて鑑賞するならば、この「赤垂れ」を「討ち入りの際の赤い血染め装束」などと読み替えることも可能であろう。

【隠題（かくしだい）・物名（ものな・ぶつめい）】和歌・連歌・俳諧で、題の詞（ことば）を表面に出さないで句の中に詠み込むこと。例えば、「きりぎりす」という題を、「秋は霧霧すぎぬれば雪降りて晴るるまもなき深山辺の里」（千載・雑下）とよみこむ類。物名（ものな・ぶつめい）。籠（こめ題）。（デジタル大辞泉）

この「隠題」の別名の「物名」と題して、元禄三年刊の『其袋』（嵐雪編）に琴風の次の句が収載されている。

（蚤・津・岸・瀬・溝・濤・帆・洲・井・苔・波）

雨つきし蟬ぞ身を干す暇（いとま）無み

琴風

この琴風の句は、「水辺の語」（蛩||あま・津・岸・瀬・溝・澗||みを・帆・洲||す・井・
苔||とま・波）を「隠題」にしたものである。

【回文・廻文（かいぶん・かいもん）】前から後からも同じに読める文。（良き月夜）（夏
まで待つな）（仇（かたき）が来たか）（確かに貸した）（わたし負けましたわ）（千葉の竹
やぶ焼けたの罰（ばち））といった庶民的なものから、（ながめしは野の花々のはじめかな）
のような俳句、江戸時代によく知られていた（長き夜のとをの眠りのみな目ざめ波のり舟
の音のよきかな）という良い初夢を祈る和歌まで、言霊のさきわう日本には無数の例があ
る。（『世界大百科事典第二版』）

其角にも、「廻文」の前書きのある次の句がある（坎窩久蔵考訂『其角発句集』）。

けさたんとのめや菖（あやめ）の富田酒（とんたさけ） 其角



『其袋』嵐雪編著・
早稲田大学図書館
蔵



同上・「物名」の琴風
の句

(六) 渭北の句鑑賞

- 宵闇の華に鞍なし五郎山 「安」
○ 花の夢こゝろはづかし五郎山 「杖」
○ 花の夢心恥かし五郎山 「写」「碑」

「鳥山八景句碑」の作者名の「渭水」は、「渭北」の誤刻で、その刻まれている句形（掲出の前句）は、宋屋の『杖の土』の句形の「花の夢こゝろはづかし五郎山」とほぼ同じと解して差し支えなからう。

ところが、渭北は、後に、元禄十七年・宝永元年（一七〇四）に、は奥羽行脚を執行し、その途次に、野州鳥山に寄り、元禄十五年（一七〇二）に、巴人が奉納した自分の句（掲出の前句）を掲出の後句のように改案して、宝永二年（一七〇五）に刊行した、その奥羽行脚の記念集『安達太良根（あだたらね）』に収載している（何故、そのように改案して収載したのかは全くの謎である）。

この『安達太良根』に収載した前書きや、その句形などは、次のとおりである（『からすやま文学の碑散歩道（皆川晃著）』、なお、濁点などを付与して置く）。

鳥山に帰路をつけて 天神に参詣すれば かたへに巴人が奉納句を集（あつめ）
はる（春）を集（あつめ）て 朝日つらつらもれり 句中に所をこめたり

中川やほうり込んでも朧月

鶯や氷らぬ声を朝日山

独活蕨び妻木こる日や比丘尼山

嵐雪

其角

専吟

赤たれに猿の手もがな底雲雀

宵闇の華に鞍なし五郎山

水聞の耳の動きや家ざくら

琴風

渭北

巴人

この前書きから、これらの句は巴人が師筋の其角・嵐雪に連なる俳人の句を、「奉納句（とするために）集め」、その奉納句は「春の句を集めて」、「朝日つらつらもれり」する句や「句中に所（山や川などの土地の名）をこめたり」する句を選定したということなのである。ここで確認して置きたいことは、これらの句形が収載されている『安達太良根』に対して、巴人が元禄十五年（一七〇二）に奉納句を献じたことを記録している宋屋の『杖の土』は、延享二年（一七四五）で、いわゆる「元禄赤穂事件」から、相当な時間を経過しているのに対して、『安達太良根』刊行の頃（宝永二年）は、まだ、「元禄赤穂事件」の余波がもろに被っているという時代史的背景があるということである。

これらのことに関して、元禄十六年（一七〇三）七月十三日の其角が泉岳寺に墓参りに行ったときの文章が今に残っている（『宝井其角全集編著篇』所収『類柑子上』『松の塵』）。「文月十三日、上行寺の盆にまふでてかへるさに、いさらごの坂をくだり、泉岳寺の門をさしのぞかれたるに、名高き人々の新盆にあへるとおもふより、子葉、春帆、竹平等の佛、まのあたり来りむかへるやうに覚えて、そぞろに心頭にかかれれば、花水とりてとおもへど、墓所参詣をゆるさず、草の丈ケおひかくしてかずならずならびたるも、それとだに見えねば、心にこめたる事を手向草になして、亡霊聖霊、ゆゆしき修羅道のくるしみを忘れよとたはぶれ侍り。」

この其角の文章に出てくる、子葉は大高源吾、春帆は富森助右衛門、竹平は神崎与五郎、

何れも其角系の沾徳門の俳人で、其角に親炙している愛弟子達と言っても差し支えないであろう。其角がその義士達の新盆の墓参りに泉岳寺に行ったところ、「墓所参詣をゆるさず」と、義士達は、大逆を犯した政治犯罪人扱いであったということであろう。

元禄時代は、江戸時代の爛熟した町人文化の頂点に達した時代であったが、それは同時に様々な統制下に置いて花開いた文化でもあった。その統制の一端を見てみると、「元禄元年（一六八八）美服禁止令布告。元禄十一年（一六九八）小唄流言等の出版取締り令出る。宝永元年（一七〇四）時事謡曲狂歌禁止。宝暦三年（一七〇六）儉約令数回出る。宝暦六年（一七〇九）生類憐れみの令廃止」（一七〇九）」（『俳句辞典近世（松尾靖秋編）』）と、それらの残滓を垣間見ることが出来る。

そして、当時のそのような言論統制などの影響が、渭北の『安達太良根』と宋屋の『杖の土』との句形の変更に、大きな影を射しているように思えるのである。すなわち、渭北は、赤穂事件の影を消すために、『杖の土』には収載されている斟斗（斟計？）の「筑子もまき野々藪は雉子の声」の句を没にして、冒頭の其角の句を二句目とし、冒頭の句には二句目の赤穂義士とは無縁と思われる嵐雪の句を持って来て、自分の四句目については、切腹した子葉の辞世の句（「梅でのむ茶屋も有べし死出の山」）を踏まえて改案をしているような雰囲気なのである。

掲出の一句目の、「心恥づかし」の「恥づかし」は、「こちらが気恥づかしくなるほど相手が立派だ」の用例で、この句では、「五郎山の花は実に立派である」というようなことであろう。句意は、「花見の華やか夢を見たが、それ以上に、この五郎山の花は見事である」（裏の意があるとすれば、この「五郎山」が「大高源吾（源五）」の「源五」と掛けての句意ということになる）。

そして、掲出の二句目の、「宵闇」は、「中秋の名月を過ぎてからの宵の暗さ」のことで、一句目の「花の夢」（晩春の季節）に対して、仲秋の季節である。「鞍なし」は、「馬に乗

つて)見に来る人もなし」の意であろうか? そして、その「鞍なし」に亡き子葉を偲んでいるような、子葉への鎮魂の一句のような雰囲気を有している。

この渭北の、子葉切腹前の、元禄十五年(一七〇二)の掲出の前句と、子葉切腹後の、元禄十七年・宝永元年(一七〇四)の掲出の後句との、この二つの異なった句形が、いわゆる、現在、東江神社境内にある「烏山八景句碑」の謎を、まぼろしの斟斗(斟計?)の「筑子(こきりこ)もまき野々藪は雉子の声」の句と相俟って、その謎の一端を解き明かして呉れている、そんな示唆を与えて呉れているように思えるのである。

渭北は、この元禄十七年・宝永元年(一七〇四)の奥羽行脚の途次に野州烏山に來たときに、斟斗と両吟半歌仙を巻いている。さらに、烏山の俳人達(夕全・斟斗・翠戸・里杜・右風・流木・羽短・丹砂・紫文)との十吟歌仙をものにしてている(「俳文芸三九・四〇号」所収「松木淡々年譜稿」)。

この渭北が、生涯の号となる「淡々」に改号したのは、其角が没した宝永四年(一七〇七)のことで、江戸を後にして、京都に発ったのは、宝永五年(一七〇八)のことであった。享保十九年(一七三四)に大阪に移住し、宝暦十一年(一七六一)に、八十八歳で没した。長い俳壇活動を通じて、俗衆の人気を集め豪奢な生活と毀誉褒貶のうちに、享保俳壇の中心勢力として君臨し続けた。渭北の号は、若き日の蕪村と交遊のあった右江麦天が、渭北二世を継いだ。淡々は、野州烏山の出身の俳人、夜半亭一世巴人・潭北・斟斗、そして、夜半亭二世となる蕪村とも深い関係にある俳人であった。

なお、『五元集』(旨原編)に収載されている句で、次の「烏山をおもむく人」の前書きにある四句を、元禄十五年の巴人の「野州烏山滝田天満宮奉納句」に関連させて、その折の其角の巴人への餞別の句と解する見解がある(皆川晃著『巴人来鳥の謎』・早野巴人顕彰実行委員会刊)。

青柳やつかむほどある蚊の声に
夕がほや白き鶏垣根より
鳴焼は夕べをしらぬ世界哉
麻村や家をへだつる水車

このことに關して、『安達太良根』（淡々編）に、「餞別」の前書きのある「発句・脇・第三」が収載されており、上記の「烏山におもむく人に」の前書きは、上記の一句目のみの前書きと解せられる。また、其角の「巴人餞別の句」ではなく「渭北（淡々）餞別の句」と解すべきなのである。

青柳やつかんで捨（すつ）る秋の蚊に
低（ウツムイ）てたつ萩の上浪
新酒はと君の医心引立（ひきたて）て

其角
渭北
沾徳

また、上記の二句目の句は、『花摘』（其角編）の「下」の「六月廿日」に「路通つるがへおもひ立ける 餞別に」の後書きを付して出て来る、其角の「路通餞別の句」である。こうして見てくると、『五元集』収載のこれらの四句は、巴人とは何ら関係のない句ということになる。

ここで、渭北の『安達太良根』と宋屋の『杖の土』について付記をして置きたい。

【安達太良根（あだたらね）】俳諧撰集・紀行。松木渭北（淡々）編著。宝永元年（一七〇四）か二年（一七〇五）刊（才麿東下の年よりの推定）。沾徳跋。宝永元年七月末から冬にかけての渭北の陸奥国松島行脚記念集。芭蕉の跡を慕った旅で、『おくのほそ道』冒頭部を

序とする。陸奥国須賀川では等躬、同国磐城では露沾、下野国黒羽では秋鴉などと、各地での一座を交える紀行に加え、其角・嵐雪・巴人ら江戸の知友、また大阪の才磨一門が入集する。(『俳文学大辞典(角川書店)』)

【杖の土(つえのつち)】俳諧撰集・紀行。望月宋屋編著。「本文」篇は、延享二年(一七四五)、自序。宋屋六十歳の折の奥羽行脚の紀行文。旅中、蕪村を訪ねて会えなかった記事が見える。「東北」篇は、寛延元年(一七四八)、雨竜跋。宋屋の奥羽行脚の句を収める。「西南」篇は、西国行脚の際の句を収める。「洛」篇は、竿秋序、嘯山跋。宋屋行脚後、在洛の諸家の句を収める。蕪村・大祇の句も見える。(『俳文学大辞典(角川書店)』)



『五元集(元)』旨原編・
早稲田大学図書館蔵



同上・其角の「烏山へお
もむく人に」の前書きの
ある句

(七) 柏十の句鑑賞

○ 大沢や入日を返すきじの声

「写」「碑」

「安」にも「杖」にもなく、「写」と「碑」に出て来る柏十の句である。この「写」からすると、先に触れたとおり、巴人が奉納した句は、途中で二回にわたり何らかの改案が施されている気配がある。一度目は、「素由ならびに門人蓼太」の趣意よるもの、そして、二度目は、寛政元己酉年（一七八九）十二月二十五日（「百艸舎 松吟」が中心になっている）のものとなる。

「杖」は、宝暦五年（一七五五）の刊行であるが、そこに収載されている宋屋の奥羽行脚は延享三年（一七四六）の頃である。この時には、上記（滝田八景）の、柏十と湖十の句は見られず、巴人の句に続いて、「牧野」と題する「筑子もまき野の藪は雉子の声」（斟計）があり、七景（七句）なのである。

上記の「写」によると、雪中庵三世蓼太らの手による改案のものは、「元禄の頃此神に奉納有（あり）しが」とあるが、少なくとも延享三年（一七四六）または宝暦五年（一七五五）以降ということになる。

そして、蓼太が亡くなったのは、天明七年（一七八七）九月七日で、その二年後の寛政元己酉年（一七八九）十二月二十五日に、この「写」が奉納されている。そして、この寛政元年（一七八九）は、夜半亭三世の高井几董が没した年に当たる。

ここで、この「写」に出て来る俳人等を、年代史的に分類すると次のとおりとなる。

（生前の芭蕉と交遊のあった江戸の俳人） 其角・嵐雪・専吟・琴風・渭北
（生前の芭蕉と交遊のない其角・嵐雪門の江戸の俳人） 巴人・柏十・湖十

(巴人の門人の蕪村と交遊のあつた江戸の俳人) 蓼太・存義・旨原・楼川 他
(巴人と同時代の烏山の俳人) 斟計(斟斗)・潭北

(蕪村門の几董と交遊のあつた俳人) 蓼太

(几董・蓼太の時代又はそれ以降のの烏山の俳人) 素由・松吟 他

そして、この「写」と「碑」とに出て来る「柏十・湖十」の「柏十」は、其角門というよりも嵐雪門で、その意味では、雪中庵三世を嗣ぐ蓼太に近い俳人ということになる(柏十が嵐雪門ということについては、『元禄江戸座俳書(今泉準一編)』に因る)。

また、この一世湖十の深川湖十の妻(俳号||花千)は、雪中庵二世桜井吏登の姉で、十三歳の若さで雪中庵の名蹟を嗣いだ蓼太とは縁の深い俳人ということになる。

さらに、蓼太は夜半亭二世蕪村が亡くなった後、京都在住の夜半亭三世を嗣ぐ高井几董は、その名蹟を嗣ぐ後見人になって貰うために、わざわざ江戸在住の蓼太を頼って江戸まで足を運んでいる。

こうして見て来ると、巴人が奉納した句が、「杖」として、それに手を加え得る俳人という、蓼太が最も近い位置にあると思えるのである。

さらに、想像を逞しくするならば、「写」「碑」で誤刻とされている、俳人の「専吟↓雪吟」、「琴風↓蓼風」そして「渭北↓渭水」の、その誤刻の「雪吟・蓼風・渭水」も、芭蕉が『おくの細道』で、「桃翠↓翠桃」・「等窮↓等躬」・「露通↓路通」などの虚名を用いたように、業俳として海内無双の名を博した蓼太の意図的な感じでなくもない(後に、これが基礎となつて石碑に刻まれるとは想像しなかったことであろう)。

ここで、「杖」にあつて、「写」と「碑」とにない「斟計」(斟斗)の句と、「写」と「碑」にあつて、「杖」にない「柏十・湖十」の句を並列して掲げて置きたい。

牧野 筑子もまき野の藪は雉子の声
大沢 大沢や入日をかえず雉子の声
興野 その原や隴の月も興野山

斟計（斟斗）（杖）
柏十（写）（碑）
湖十（写）（碑）

烏山の俳人斟計（斟斗）は、早野家蔵『晋其角先生出点百韻』で、この「柏十・湖十」とは同座している旧知の俳人ということになる。そして、この斟計（斟斗）の「牧野」の句と柏十の「大沢」の句は、「雉子の声」で、そして湖十の「興野」の句では、「まき野」その原」で、何となくその背景が似通っている雰囲気でなくもない。

そして、何よりも、（杖）の「七景」を「八景」（「写」「碑」）とするために（中国の「瀟湘八景」などに模して）、斟計（斟斗）の句と柏十・湖十の句とを置き換えたように理解をしたのである。

さて、柏十のこの句について、その地名の「大沢」は、地元烏山も確かに大沢川の「大沢」という地名（川名）はあるが、全国的に何処にでもある地名（川名）であり、たまたま、柏十に「大沢」の句があったということなのではなからうか。

「雉子」は三春の季題で、子季題として、「きぎす、きぎし、雉子の声、焼野の雉子」などがある。この句の眼目は、その「雉子の声」が悲しげに「入日をかえず」如くに鳴いているという、この譬喩的な句作りにある。しかし、この譬喩は、其角や沾徳のように、「奇抜・奇計・卑属」なそれではなく、極めて、自然な穏当な譬喩（比喩）というところに、「古今第一の譬喩」の句と賞されている嵐雪一門の句風を感ずる。

蒲団着て寝たる姿や東山

嵐雪

この嵐雪の句を評して、巴人の高弟蕪村門に連なる宋屋門の三宅嘯山は、「譬喩ノ句難シ。

此ノ篇、古今第一。温厚和平、真ニ平安ノ景ナルカナ」と絶賛した（『俳諧古選』）。ちなみに、先に触れた、夜半亭の庵号が『烏山町史』に因ると、一世巴人↓二世蕪村↓三世几董↓四世閑空↓五世可董↓六世金仙↓七世素行↓八世薰江と続くという、その三世几董から四世閑空へとの引き継ぎは、この嘯山の「寛政七年七月初代巴人より伝来の一軸を師嘯山の家宝より請る」（『烏山町史』）との、「巴人↓宋屋↓嘯山」という流れであって、それは、「巴人↓蕪村↓几董」の流れのものではない。

そして、巴人の夜半亭俳諧というのは、この「巴人↓宋屋↓嘯山」や「巴人↓蕪村↓几董」と厳密に区別すべきではなくて、これらの錯綜した関係の中にあつて、夜半亭三世几董をもつて断絶したのではなく、今に夜半亭俳諧の流れを絶やさない動きがあるのだろう。最後に、この柏十の句と赤穂事件との関連ということになると、この一句では見えてこないが、例えば、現在の烏山八景句碑の「碑」の八句の中の一句とすると、やはり関連しての鑑賞は可能となつて来るであろう。

その鑑賞の一つに、この句の前の、渭北の「花の夢心恥かし五郎山」の、この「五郎」を赤穂義士の大高源吾の「源吾（五）」と解し、この湖十の句の「大沢」（低い沢）を大高（高い大高）の「振り」と解するなどは、俳諧（連句）の付合（前句を鑑賞し、その前句に「添・随・放・逆」などの観点で付句をする）などでは、ごく常識的な発想の範囲内のものであるう。

ちなみに、この「写」には、次のような「五郎山」の句が収載されている。

夜も香に花の兄見よ五郎山

鶏口 （写）

この中七の「花の兄見よ」の「花の兄」とは、他の花に先立って咲くところから、「梅」の意である。その反対に「花の弟」となると、他の花に遅れて咲くところから、「菊」のこ

とである。この「花の兄」の句は、大高子葉（源吾）の辞世の一句、「梅でのむ茶屋もあるべし死出の山」を踏まえてものであることは明らかなどころであろう。すなわち、この「五郎山」は、赤穂義士・大高源吾の、その「源吾（五）」のイメージを、この句に接する人に伝わって来るといふ理解である。

ここで、俳諧（連句）の「付合（つけあい）」などについて、簡単に触れて置きたい。

【付合（つけあい）】。〈寄合（よりあい）〉と同義に用いることもあるが、普通には十七音節（五・七・五）の長句（ちようく）と十四音節（七・七）の短句（たんく）を、ことば、意味、情趣などを契機として付け合わせたもの、また交互に付け連ねることをいう。付合の集積によって成立した連句文芸では、発句（ほつく）以外の句をすべて付句（つけく）と呼ぶが、二句一章の最小単位では、付けられる句を前句（まえく）、付ける句を付句と称する。前句が長句、付句が短句の付合は短歌に似るが、前句が独立しつつも蓋然性に富む意味内容を持ち、その判断を付句の作者の読みにゆだねるといふ点で、短歌とはまったく異なる。（『世界大百科事典第二版』）

【執中の法（しゅちゆうのほう）・四道（しどう）】執中の法Ⅱ前句に付句を付すときに、何を付けるかという趣向を定めるため、前句の句裏に手がかりとなるべきものを読み取る方法。四道Ⅱ特に連歌の時代に、前句に対する付句の態度・姿勢を四つの基本に分けたもので、「添（てん・そう）」・「随（ずい・したがう）」・「放（ほう・はなつ）」・「逆（ぎやく・さからう）」をいう。（『連句辞典（東京堂出版）』）

(八) 湖十の句鑑賞

- ○ その原や朧の月も興 (キャウ) 野山
- その原や朧の月も興 野山

「写」
「碑」

詠史句 (歴史上の事柄を題材としている句) というのは、俳句の世界よりも多く川柳の世界で顕著に見られる分野である。この詠史句を得意とした作家に、深川湖十がいる。延宝四年(一六七六)の生まれで、巴人と同年である。没したのは、元文三年(一七三八)、この前年に、巴人は京都を後にして、日本橋本石町の夜半亭に移り住んで来る。この元文



几董像『俳諧百家選』



蓼太像『藤衣』

二年（一七三七）には、潭北は『民家童蒙解』を刊行している。

湖十（初代深川湖十）は、江戸の人、曾氏（一説に森部氏）、通称は朽木屋九兵衛。初め鼠肝（そかん）門、のち其角門。初号は選山。元禄中ごろから十三年間諸国行脚に出、その行脚中に其角は没し、その行脚から帰江後、秋色から其角の点印（半面美人）を付嘱され、其角座を主宰する。

熊坂が長刀（なぎなた）あぶる霜夜かな

謡曲『熊坂』の平安末期の盗賊。「凄烈の気みなぎる霜夜、獲物を待ち伏せて熊坂長範ひきいる夜盗の群れが焚き火を囲んでいる。闇の中にその精悍な髭面が赤々と火照り、炎にかざした長刀がぎらぎらと光る。季語は『霜夜』で、冬の句」（『日本古典文学鑑賞第三三巻俳句・俳論（尾形仿・白石悌三編）』）。

こういう詠史句では、湖十は其角門でも最右翼であったのだろう。しかし、「赤穂事件」については、今に話題にされるような句は見られない。それは、当時の幕府の統制が厳しく、旧来からの「権限様（注・徳川家康）の御儀は勿論、御当家（注・徳川家）の御事板行（注・出版）一切無用」に加えて、「人々家筋御先祖の事彼は相違の義書現わすこと禁止」（御触書寛保集成）の制禁などと関係してこよう。

今に、「川柳」という名を文芸ジャンルの一つにその名を冠している柄井川柳は、巴人・柏十・湖十の世代ではなく、次の、蕪村・蓼太・二世湖十世代以降の前句付点者（一句立ての前句に付句する付合の指導者）である。その川柳が編んだ『誹風柳多留』（初編）には、赤穂事件関連の句は次の一句しかない。

（代り代りに代り代りに）

恐悦を水と榼（しきみ）で申し上げ（柳多留初・二四七）

句意は「四十七士が『代わり代わりに代わり代わりに』亡君の墓前で本懐達成の喜びを水と榼を供えて奉告している」ということであろう。前句の「代り代りに代り代りに」があつて、やや鮮明になつてくるという感じである。

しかし、『誹風柳多留』には、この前書きは省略されていて、この句の前とこの句との後の句を三句続けると次のように収載されている。

夜が明けて狩場狩場へ外科を呼び（柳多留初・二四六）

恐悦を水と榼（しきみ）で申し上げ（柳多留初・二四七）

こそぐつて早く受けとる遠目鏡（柳多留初・二四七）

この「夜が明けて狩場狩場へ外科を呼び」は、曾我兄弟が仇討ちをして、「夜が明けると手負いの者の治療で外科医がてんでこまいている」という句。これに、「恐悦を水と榼（しきみ）で申し上げ」と来ると、この句は赤穂義士の句というのが分かつて来る。次の「こそぐつて早く受けとる遠目鏡」は、泉岳寺付近を遠めがねで覗いている句ということになる。ここに、前句付点者の柄井川柳の選句と、この柄井川柳の選句を、一種の俳諧の「付合」の要領で編集したのが、『誹風柳多留』の編集者の「呉陵軒可有（ごりようけんあるべし）」である。

この柄井川柳と呉陵軒可有との『誹風柳多留』は、明和二年（一七六五）の初編刊行から二十四編と続き、両者亡き後も、天保十一年（一八四〇）までに、百六十七編の多きを数え、まさに、江戸時代の「浮世絵」に匹敵するような「川柳（古川柳）」の世界を築き上げて行く。

しかし、この柄井川柳と呉陵軒可有とが築き上げて行った「川柳(古川柳)」の世界は、その「誹風柳多留」の「柳多留」が示すように、「俳諧(連句・俳句)」への扉を開く仲立ち役の「縁結びの柳多留(樽)」を意味するものであって、「俳句(発句)」と「川柳(付句)」とは「俳諧(連句)」を母胎とする一卵性双生児なのである。

また、「俳諧・俳句」の「俳」と「誹風」の「誹」とは、「吾門(注・蕉門)」には俳諧古人なしと看破する眼より言語に遊ぶといえる道理にまかせて、俳、誹の二字ともに用いて捨てず(『山中問答(立花北枝著)』)と、其角なども「誹番匠」と盛んに「誹」を使用しているが、どちらでも可ということが一般的な理解なのである。

しかし、呉陵軒可有がわざわざ「誹風」という言葉を使用しているのは、「俳諧」のそれよりもより遊戯的な「遊びの世界」というようなことを匂わせているような雰囲気でない。

ちなみに、上記掲出の湖十の熊坂長範の句と川柳のそれとは、次のとおり別世界となつて来る。

熊坂が長刀(なぎなた)あぶる霜夜かな (初代湖十)
わんぼうはやると物見の松でいひ (柳多留三・五六五)

湖十の句は、「しんしんと冷える霜夜の中での長刀をかざしながら手をあぶっている夜盗の親玉熊坂長範」の風姿そのものを詠出しているのに対して、柳多留の句の方は、その熊坂長範が、「身につけた古わんぼう(布子)、其れは貴様にくれてやる。有り金残らず置いて失せろ」という、いわゆる「熊坂長範」の風姿というよりもその長範の「科白」の振りなのである。

芭蕉↓其角↓秋色↓湖十(初代)と続く、「其角座(堂)俳諧」も、其角堂七世永機を経

由して、さらに、其角座伝統十三世と今に続いているようである（NPO法人其角座・ホームページ）。

ここで「碑」と「写」との違いを再述すると、「写」にある「滝田八景」が「碑」では「烏山八景」となり、「写」の句の頭にある「朝日山・中川・比丘尼山・赤垂瀨・五郎山・大沢・興野・桜井里」の地名が「碑」には無いということである。

その上で、それらの七句目にある湖十の句を見てみると、季題「朧月」（三春）が、二句目の嵐雪の句とダブっているということが気にかかって来る。この八句を全て巴人が選句するとしたら、何もわざわざダブルようなことはしないように思われるのである。

これは、やはり「杖」（七句）と「安」（六句）と比較して、「杖」（七句）の地元の斟計（斟斗）の句「筑子もまき野」の藪は雉子の声」を削って、新たに、「柏十」と「湖十」との二句を加えて、八句としたと解すべきなのであろう。

そして、この二句は、名前も「柏十」と「湖十」と、その「十」が同じで、内容・スタイルと共によく響きあっているように思えるのである。

大沢や入日をかえず雉子の声

柏十

その原や朧の月も興野山

湖十

柏十が「入日」の夕方の景とすると、湖十は「朧月」の夜分の景となる。夕方から夜分への景移りで実にスムーズである。柏十の「大沢」が川の景とすると、湖十は「興野山」で山の景となる。柏十の「雉子」は、湖十の「野」と、柏十の「日」に対して湖十の「月」と、実に、両者の景とは、相互に挨拶句のような自然な妙趣を有している。

これは、おそらく、この二句を選句して、ここに配置をした、丁度、『誹風柳多留』であれば、編者、呉陵軒可有に該当する選句者（、烏山の俳人斟計Ⅱ斟斗？か、もしくは「写」

の本文に出て来る雪中庵三世大島蓼太などが上げられる)の絶妙な趣向の結果というように思えるのである。

ともあれ、この句と赤穂義士の関係ということになると、赤穂事件の「第一次事件・第二次事件・第三事件」が全て終わった、四十七士切腹の後の、鎮魂の追悼句ということになる。この「興野山」の「きょう」は、わざわざ「キヤウ」と振り仮名をふり、それが、地名の「興野」の「きょう」と「(お)経」の「きょう」とが掛けられていると理解をいたしたい。そして、柏十の悲しげな「雉子の声」は夜に入り湖十の僧の「声明」と化していくというイメージの展開である。

そして、この「興」(きょう)に、地名の「興野」の「きょう」と、「(お)経」の「きょう」とが掛けられているということは、「写」の「其外(そのほか)」に出て来る次の句からも推察することが出来るように思えるのである。

経を読む鳥を枝折や比丘尼山

楼川

この作者、谷川楼川(ろうせん)は、巴人や潭北の無二の知友の稲津祇空(ぎくう)の門人。江戸神田の人。江戸座宗匠中の中心人物で、妻は田女(でんじょ)、養子は鶏口(けいこう)で、共に存義(ぞんぎ)側の点者をつとめた。

次に田女と鶏口(再掲)との句も併記して置こう。

大沢も蝶も遊ぶや草の波
夜も香に花の兄見よ五郎山

田女
鶏口

ここで、「写」の本文に出て来る、「素由ならびに門人蓼太が趣意なるを神田庵に知誌」

の「神田庵」は、この楼川の庵号なのかも知れない（とすると、巴人が奉納した「杖」の七句を改案して、「写」の八句にしたのは、「杖」に出て来る地元の俳人斟斗Ⅱ斟計の他に、この「写」に出てくる、地元の俳人柳素由、そして、雪中庵三世大島蓼太、さらに、この谷川楼川も上げられるのかも知れない）。

この楼川は、巴人、そして、関東出遊時代の若き日の蕪村とも親交があり、元文四年（一七三九）に「歳旦帳」を編むが、その中には、蕪村の前々号の「宰町」の号での句や存義や湖十の句も見られる。

蕪村が夜半亭門に入門したのは、元文二年（一七三七）の二十二歳の頃で、蕪村はこの俳諧のスタートの時点で、蕪村は、存義（別号・李井庵など）、旨原（別号・百万坊、其川など）、楼川（別号・木犀庵など）などの、当時の江戸座の若手と親交があったということになる。

そして、巴人亡き後、当時の蕪村と親交のあった俳人達は、沾徳系の二世青峨から独立した存義の一門に結集し、そして、これらの連衆が延享二年（一七四五）の『江戸二十歌仙』の刊行と結びついて来る。

「写」の「其外」に収載されている八名の俳人たちは、この存義とその一門の俳人たちと言って差し支えなからう。存義は、元禄十六年（一七〇三）の生まれ、享保十九年（一七三四）に宗匠として立机し、存義側をひきいて江戸座の代表的な点者として活躍した。天明三年（一七八三）、八十歳で没した。この天明三年には、夜半亭二世与謝蕪村も、その六十八年の生涯を閉じている。

この「写」に出て来る存義の句は次のとおりである。

景色は都を笑ひ朝日山

存義

(九) 巴人の句鑑賞

- 水聞の耳のうごきや家ざくら (題「桜井里」) 「杖」
- 水聞の耳の動きや家ざくら 「安」
- 水聞の水の動きや家桜 (題「桜井里」) 「写」「碑」

早野巴人、延宝四年(一六七六)の生まれ。通称は甚助。別号は竹雨・宗阿・宋阿・郢月泉・夜半亭。下野国烏山(栃木県那須烏山市)に生まれたが、早くに江戸へ出た。俳諧は、服部嵐雪・宝井其角に師事した。両師他界後は、松木淡々・高野百里・柳川琴風・稲



湖十像『たつのうら』



存義像『江戸の幸』

津祇空・同郷の常磐潭北らと親交を重ねた。享保半ばに京へ移住して、約十年間滞在。元文二年（一七三七）に再び江戸に下る。東下後、日本橋石町の居を夜半亭と名付けて、若き与謝蕪村や結城在住の砂岡雁宕らを指導し、且つ、若き頃を懐古しつつ風雅の俳諧の道を全うした。その夜半亭俳諧は、夜半亭二世与謝世蕪村、そして、夜半亭三世高井几董と引き継がれ、今に、その夜半亭俳諧の風潮は、その産土の地の野州烏山を始め。江戸、そして、京都で引き継がれている。

巴人関連文献のリーディング・ケース的なものは、潁原退蔵氏の「夜半亭巴人」（潁原退蔵著作集題十三巻）所収）であろう。最近のものとしては、丸山一彦氏の「蕪村の師——夜半亭宋阿」（国文学解釈と鑑賞八三七・平成十三年二月号）所収）が上げられるであろう。また、地元の皆川晃氏の『からすやま文学の碑散歩』所収の「早野巴人句碑」「烏山八景句碑」などが参考となる。

掲出一句目の「安」と「杖」との句が、巴人が奉納した句の原形なのである。巴人の高弟望月宋屋がこの「杖」を宝暦五年（一七五五）に刊行するが、実際の宋屋の奥羽行脚は延享三年（一七四六）で、この時には巴人も潭北も没している。

この「杖」で巴人がこの奉納額を献じたという日付が「元禄十五壬午（一七〇二）春」で、この時、巴人は二十七歳である。そして、それまで「竹雨」という号であったが、この奉納額で始めて、俳号Ⅱ（願主）巴人が出現する。

また、この元禄十五年（一七〇二）は、天満宮八百年御忌の年で、其角の『類柑子（中）』の次の一文があることにも、先に触れた。

「元禄十五壬午 ○聖廟八百年御忌 ○西行上人五百年忌 ○宗祇法師二百年忌 ○貞徳翁五十年 霜月十五日懐旧の心をのべ侍る。

帯解（おびとき）も花たちばなの昔哉

晋子

かの長頭丸（松永貞徳）のすがたにて昇殿ありし昔をいへる句也。夢想を祝し侍る会盟の事につけて才子文人筆を置かざるごとし。其名高き人の年忌に廻り合するも風俗おとろへず、飛梅のかるがる敷（しく）云出（いいだす）べきにあらずと

松梅やあがむる年も八百所 晋子 （亀井戸千句奉納発句略之）

そして、巴人が「野州烏山滝田天満宮」に其角・嵐雪らの句と共に自分の句を奉納した。「元禄十五年」は、この「○聖廟八百年御忌 ○西行上人五百年忌 ○宗祇法師二百年忌 ○貞徳翁五十年」という記念すべき年に当たり、巴人の師の其角が、「亀戸天満宮」に「千句奉納発句」を献じたことに起因して、巴人は自分の生まれ故郷の「野州烏山天満宮」に、師の其角の「俳諧の弥栄（いやさか）」を願っての奉納句を献じたことと軌を一にしているということについても、先に触れた。

ここで、巴人が奥羽行脚を決行したのは、宝永五年（一七〇八）の頃とされているが（浄阿編『つかのかげ』、それを、この元禄十五年（一七〇二）と六年程遡ることは、決して飛躍したことでなからう。

とにもかくにも、巴人は、これらの奉納句を「野州烏山滝田天満宮」に献じて、一大転機を試みたということと、その奉納句の中の、この巴人と号を付しての一句、「水聞の耳のうごきや家ざくら」は、当時の巴人の傑作句と、巴人自身そういう自負を有していたものと理解することができよう。

そして、この巴人の句は、当時の其角の洒落風俳諧の一つの典型的な作品で、この句を鑑賞するためには、次のような「洒落風」俳諧についての基本的な理解が必要になって来よう（再掲のものを含め次に一括掲載をして置きたい）。

【洒落風（しゃれふう）】元禄末期から其角がはじめた付合（つけあい）の新風。『つげのまくら』は洒落風について、表（おもて）八句に述懐・恋・名所を詠む式目否定の、ばれ崩しの作だと非難するが、其角自身『句兄弟』の「横の題」（当世的）は、「洒落にもいかにも我思ふ事を自由に云（いい）とるべし」としている。『俳諧或問（わくもん）』には伝統にこだわらぬ新奇な体であり、その座を同じくしている連衆でなければ理解できない難解さを好み、洒落風の作には半面美人の五十点の点印を用いたとある。（『俳文学大辞典（角川書店）】）

【聞句（ききく）・聞発句（ききほつく）】（再掲）「是は謎の句にて思惟すればよく聞（きこ）ゆるなり。聞発句ともいへり。闇の夜は松原ばかり月夜かな、嗅（かい）で見よ何の香もなし梅の花、などといふ類（たぐい）なり。」（早川丈石著『誹諧名目抄』）

【隠題（かくしだい）・物名（もののな・ぶつめい）】（再掲）和歌・連歌・俳諧で、題の詞（ことば）を表面に出さないで句の中に詠み込むこと。例えば、「きりぎりす」という題を、「秋は霧霧すぎぬれば雪降りて晴るるまもなき深山辺の里」（千載・雑下）とよみこむ類。物名（もののな・ぶつめい）。籠（こ）め題。（『デジタル大辞泉』）

【ぬけ・ぬき体・ぬき句】「俳諧で、主題を句の表面に表さないで、暗にそれをほのめかす手法。談林俳諧で流行した」（『デジタル大辞泉』）。「発句の『ぬけ』は、ぬかれた語を推測して補うことによつて、一句が解釈可能となる点に面白みを追求した手法であり、その謎解きの面白さとそれに付随する表現の斬新さが、談林俳人の心をとらえたのであった。そして、談林の時代が終焉を迎えた元禄期以降も、たとえば其角の『饅頭で人をたづねよ山桜』のような、解釈にあたって想像力を働かせて文脈を補うことを迫る謎の句が好んで詠

まれている通り、「ぬけ」の謎的な興味は俳諧の本質に根ざすものであった（「元禄江戸俳壇の研究（牧藍子稿）」）。

さて、掲出一句目と二句目とは、中七の「耳のうごきや」（「杖」と「耳の動きや」（「安」）との「うごき」と「動き」との違いだけで、同じ句形のものとして解して差し支えなからう。この「耳のうごき（動き）や」の句と三句目（「写」「碑」）の中七の「水の動きや」の、「耳」と「水」との違いになって来ると、これは句意そのものが違って来て、どちらのものが正しいのかという検討が必要になって来よう。

このことに関して、巴人が奉納した句は「耳」が正しい句形で、「水」の句形のもものは、後の人が「耳」よりも「水」の方が違和感がなくに鑑賞できるということと、何時しか「水」と変質して鑑賞されるようになった（あるいは、単純な誤写なり誤刻の結果、「耳」よりも「水」の方で一般的に鑑賞されるようになった）いうことについて、先に触れた。

ここでは、「耳」の一句目（「杖」）の句形を中心にして、「題」のない二句目（「安」）と三句目の「水」の句にさいては、副次的に鑑賞することといたしたい。

まず第一に、この掲出句（一句目・他）は、聞句（ききく）・聞発句（ききほく）の謎句仕立ての句なのであろう。そして、その謎句の謎を解くためには、この句は、隠題（かくしだい）・物名（もののな・ぶつめい）の句で、「水聞の耳のうごきや家ざくら」の中に、この句の「題」の「桜井里」が隠されているという検討が必要となつて来よう。

さて、「題」の「地名」の「桜井里」の「桜」は、これは、下七の「家ざくら」の「桜」ということは容易に見つけることが出来る。次の「桜井里」の「井」は、やや厄介で、当時、堰の維持・管理などの利水の組合などのことを「井組（ゆぐみ）」と言って、掲出句の上五の「水聞（き）」が、その「井組」の「水番人」のようなことを意味し、その「井組」の「井」が、「桜井里」の「井」というようなことなのであろう。次に、「桜井里」の「里」

については、下五の「家ざくら」の「家」がある方が「里」で、その「里」を暗示するために、「山」の「山ざくら」ではなく、造語的な「家ざくら」を持って来たというようなことなのである。すなわち、この掲出句は、まさしく、「思惟すればよく聞（きこ）ゆる」ところの「聞発句」なのである。そして、どうやら、上五の「水聞（き）」の「聞（き）」は、この「聞（き）発句」の「聞（き）」を暗示していて、この句は「聞（き）発句」の謎句で、どうか、その謎を解いて下さいというような、茶目つ気たっぷりな、この句の作者の「見え見え」の様子が覗えるような雰囲気なのである。

ここで、この上五の「水聞（き）」については、①『水紋』のこと。②『水門』のこと。

③水に関する仕事を司った人。④地下水の水脈を探索する職の人」などを紹介しているものもある（皆川晃著『巴人來鳥の謎』）。このことについては、「井組」の「水番人」

と、「③水に関する仕事を司った人」（井組Ⅱ水利組合・水門管理の番人、水番所の役人・見廻り衆など）と理解して、単純に、ここでは、「水番人」ということにして置きたい。

次に、この掲出句は「ぬけ体」の「ぬき句」なのである。すなわち、「其角の『饅頭で人をたづねよ山桜』のような、解釈にあたって想像力を働かせて文脈を補うことを迫る」謎句仕立ての句なのである。

巴人の、この「水聞の耳のうごきや家ざくら」の句、「水聞の耳のうごきや／（馬耳東風）也（家ざくら）」で、この「馬耳東風」（他人の意見や批評に注意を払わず、聞き流すこととのたとえ。もとは春風が馬の耳に吹く意。人が心地よいと感じる春風が吹いても、馬は何も感じないように見えることからいう）が「ぬけ」になっていると解したい。

この句の句意は、「水番人の耳は、『馬耳東風』で心地良い風を受けてもそよとも動かない。折からの『桜井の里』の桜は、どこもかしこも、その東風を受けて満開である」ということになる。

ここまできると、三句目の「水聞の水の動きや家桜」の「耳」でなく「水」の句につい

ても、「耳」の、「馬耳東風」ではなく、「水」の、「我田引水」が「ぬけ」になっているように思えるのである。

句意は、「水番人が見張りをしているが、その水の動きは『我田引水』（自分の田んぼにだけ水を引き入れ、他人の田んぼのことは一切考えないことから、他人のことを考えず、自分に都合が良いように考えたり、ものごとを行ったりすること）で、『桜井の里』のわが家の方にうまく行くようにしている。それを象徴するかように、その『家桜』は満開である」ということになる。

さて、これらの掲出句の鑑賞は、これで十分のように思われるが、この句を含んだ『杖』所収の七句（巴人が野州烏山滝田天満宮に奉納した七句）を、全体として見たときに、やはり、その奉納した日付と、この巴人の句では、「耳」がどうにも気がかりなのである。それらの七句をここで再掲をして置きたい

（再掲）

「題

朝日山	鶯の水らぬこゑやあさ日やま	東武	其角
中川	中川やほほり込んでも朧月		嵐雪
比丘尼山	独活蕨つま木樵る日やびくに山		専吟
前垂山	赤だれに猿の手もがな庭雲雀		琴風
五郎山	花の夢こゝろはづかし五郎山	後名淡々	渭北
桜井里	水聞の耳のうごきや家ざくら	願主	巴人

牧野 筑子もまき野の藪は雉子の声

鳥山 斟計

右 元禄十五年 春

この元禄十五年（一七〇二）の前年の三月十四日に、赤穂藩主の浅野長矩（ながのり）が、高家旗本・吉良義央（よしなか）に対して江戸城殿中において刃傷に及んで、長矩は殿中抜刀の罪で即日切腹となり赤穂藩は改易となったことについては先に触れた。そのいわゆるゆる赤穂事件が勃発して、赤穂浪士が吉良邸に討ち入りするのではないかという、そういう騒然とした中で、これらの七句なのである。

そして、その赤穂浪士の中には、この七句の作者と同門ともいうべき、其角・嵐雪に連なる沾徳門の俳人が、何名か名を連ねている。その一人が大高源吾（俳号・子葉）で、巴人（俳号・子葉）は兄弟子と言っても差し支えなからう。その子葉に「耳」の句がある。それは、丁度、浅野長矩が刃傷に及ぶ直前のことで、まだ、浪士ではなく、赤穂藩士として江戸での勤めの平穏な頃に巻いた歌仙（三十六句形式の連句）の、その中の一句なのである。

その歌仙の表六句を次に掲げて置きたい（発句・脇などを付記して置く）。

発句 うぐひすの朝日綱張（つなはる）壁の穴

脇 辛夷が覗く峡（たに）の奥行 沾徳

第三 滝の淀春ずれるほど広どりて

四 振ひはじめは傘持が袖 富森氏 春帆

五 湯あがりの耳は城下へ旅の月
折端 いやがるものを裏で踊らす

大高氏 子葉（月の定座）
萱野氏 涓泉

この「春帆（しゅんぱん）」は、富森助右衛門（とみのもりすけえもん）、「涓泉（けんせん）」は、萱野重実（かやのしげざね、通称・三平）である。この五句目の「月の定座」が、子葉の句で、これが何とも意表を突いた「湯上がりの耳」の句なのである。

この歌仙は元禄十六年（宝永元年・一七〇三）二月四日に自刃した義士（ちなみに涓泉は前年正月十四日自刃）への一週忌の追善として編まれた『橋南』（沾州編・沾徳序）に収載されていて、その刊行は宝永二年（一七〇五）とされている（復本一郎著『俳句忠臣蔵・新潮選書』）。

この『橋南』刊行以前に、其角や巴人は、この沾徳や沾州が中心になって巻いた、この歌仙を目にしていたということは、容易にあり得ることであろう。

そして、この子葉の「湯あがりの耳は城下へ旅の月」は、其角や沾徳好みの「洒落風の「新奇・奇抜」な句として、其角門や沾徳門の一座の中では、注目を集めていた句のようにも思えるのである。

それが故に、赤穂藩士から今や赤穂浪士となり、主君の仇を討つべく、大石内蔵助の情報参謀として、骨身を削っている、嘗ての連衆仲間の、巴人に取っては兄弟子とも言うべき、大高子葉への挨拶句として理解することも決して飛躍した見方ではなからう。

とすれば、巴人の「水聞の耳のうごきや家ざくら」の句は、「吉良邸の情報収集役（子葉）の耳の動きは、湯上がりの耳のようにさっぱりしていて、大願成就の花の報せも間もなくあることだろう」というようなことが隠されているという理解も、それほど無理筋でもないように思えるのである。

ここまで来ると、この巴人の「写」や「碑」の、「耳」ではなく「水」の、「水聞の水の

動きや家桜」の句は、赤穂浪士の討ち入り前の、巷間、其角と源吾（子葉）の句とされている、次の「両国橋の別れ」のものなどに起因しているように思えるのである。

年の瀬や水の流れと人の身は

其角（伝）

明日（あした）待たるるその宝船

子葉（伝）

この其角（伝）の句の句意は、「年末を迎えると、水の流れや人の身の無常迅速ということを感じられる。今、浪士になっている貴方の身も、さて、来年はどうなっているのでしょうか」というようなことであろう。

それに対して、子葉（伝）の句の句意は、「世の中は新しい年の宝船を迎える準備で余念がないが、来年といわずその宝船は明日お迎えいたしたいと願っています」というようなことになろう。

これらのことを背景にして、「水聞の水の動きや家桜」の背後の句意は、「情報収集役（子葉）のその任は、水の流れのように無常迅速のことであるが、明日待たるる宝船のように、大願成就の花の報せも間もなくあることだろう」のようなものになって来る。

しかし、これは元禄時代の其角・子葉・巴人の時代ではなく、時代は下って、安政三年（一八五六）の頃の歌舞伎「松浦の太鼓」や「土屋主税」などの世界のものなのである。

そして、確かに、巴人が奉納額を献じた時代史的な背景は、元禄十五年（一七〇二）と、まさに、「赤穂事件」の第一次事件（浅野内匠頭の切腹と赤穂藩の改易）の翌年の春で、その年の十二月に、第二次事件（吉良邸討ち入りと仇討ち）、そして、元禄十六年（一七〇三）二月四日の「赤穂浪士自刃」（第三次事件）と、この最中でのものであるということは、避けて通れない現実のこととして、それを加味して鑑賞することも、これまた許容範囲内のように思えるのである。

【元禄赤穂事件（げんろくあこうじけん）】江戸時代中期に発生した赤穂浪士による吉良義央（よしなか）及びその家人の殺害事件。この事件は一般に「忠臣蔵」としても知られているが、この名称は本件を題材とした人形浄瑠璃と歌舞伎の『仮名手本忠臣蔵』の通称、およびそこから派生したさまざまな作品群の総称であり、本件自体を指す語ではない。元禄十四年（一七〇一）三月十四日、播磨赤穂藩主の浅野長矩（ながのり・内匠頭）が、高家旗本・吉良義央（上野介）に対して江戸城殿中において刃傷に及ぶ。浅野長矩は殿中抜刀の罪で即日切腹となり赤穂藩は改易となった（第一次事件）。遺臣である大石良雄（内蔵助）以下、赤穂浪士四十七名（四十七士）が翌元禄十五年（一七〇二）十二月十四日、深夜に吉良屋敷に討ち入り、主君が殺害しようとして失敗した吉良義央を家人や警護の者もろとも殺害した（第二次事件）。この一連の事件を指す。さらに、元禄十六年（一七〇三）二月四日に、赤穂浪士は切腹を命ぜられ全員切腹し、その赤穂浪士の遺子のうち、出家した者を除き十五歳以上の男子は流罪となった（この全員切腹の結果を第三次事件として置きたい）。（「ウィキペディア百科事典」など）



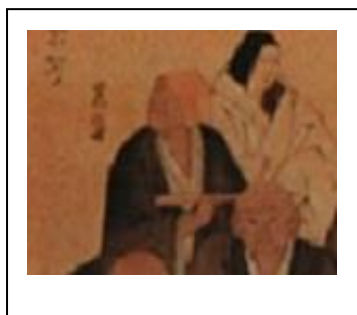
↑ 蕪村画「俳仙群会図」

右奥

巴人（宋阿）

↓ 巴人（宋阿）拡大図

前は其角



(十) 斟斗(斟計)の句鑑賞

○ 筑子(こきりこ)もまき野の藪は雉子の声 「杖」

東江神社(那須烏山市)境内にある「烏山八景句碑」の中には、この句は存在しない。そもそも、巴人が「元禄十五壬午(一七〇二)春」に「野州烏山(栃木県那須烏山市)滝田天満宮」に、其角や嵐雪の句と一緒に自分の句を奉じたという記録は、宝暦五年(一七五五)に刊行された『杖の土』(宋屋編著)に記載されていることに因る。そして、この掲出句は、その『杖の土』には載っているが、現在の「烏山八景句碑」には刻まれていない、謂わば、幻の一句ということになる。

その『杖の土』には、この作者名に「烏山」とあり、那須烏山の俳人で、この「斟計」という俳号は、当時の俳書には殆ど見掛けない作者なのである。これと似た「斟斗」という俳号は、早野家蔵『晋其角先生出点百韻』や巴人と並んで江戸座の宗匠となる常磐潭北の「潮越」などにもその名を見ることが出来る、当時の那須烏山を代表する俳人ということになる。

この「斟計」の「計」と「斟斗」の「斗」に関連して、『斗』と『計』は、草体の類似から屢々同じ文字として用いられる。いわば通字と称していいものである(『日本文学研究資料叢書 蕪村・一茶』所収「祇空と淡々(桜井武次郎稿)」)ということから、京都の宋阿門の俳人で、当時の江戸座や那須烏山の俳人とは交流のない宋屋の『杖の土』における、「斟斗」と解すべきを「斟計」と読み間違ったもののように思えるのである。

そして、現在の「烏山八景句碑」の建立者は、「大鐘新斗」で、その「新斗(しんと)」と、この『杖の土』に出て来る「斟斗(しんと)」は、斟計は誤記?」は何らかの系譜に連なっている俳人のように思えるのである。

ここで、『杖の土』の「野州烏山滝田天満宮に往昔亡師（注・巴人）」が奉納したとされる七句は、いわゆる「題詠」で、それぞれ地名の入った句という点については前で触れた。そして、琴風の「赤だれに猿の手もがな庭雲雀」は、現在の「烏山八景句碑」では「赤垂淵」と解されているが、「前垂山」が正しいということについても先に触れた（『宝井其角全集（年譜編）』「注一七四」）。

そして、これらの地名については、特定できないものもあるが、実際に「野州烏山滝田天満宮」周辺に、それらしき地名も存するのである。中でも、この一番最後の「牧野」は、仇討ちものの謡曲で名高い「放下僧」に由来する地名で、その放下僧に関連する「牧野家」の墓も現存する（その墓は、早野巴人の生涯の畏友で、俳諧宗匠・庶民教化指導者として名高い常磐潭北の墓と同じ、善念寺境内の中にある）。

この謡曲「放下僧」の「放下」とは現在の大道芸人のことで、その芸の一つにで、「筑子・小切子・こきりこ」（竹製の打楽器）を使うものがあり、その筑子は、長さ二〇〜三〇センチメートルの竹筒のことで、それを打ち合わせたり、放り投げて曲取りをしたり、指先で回したりするもので、現在でも民族芸能で「こきりこ踊り」などが伝承されている。

そして、この「筑子」こそ、赤穂義士の一人の、其角系沾徳門の俳人、そして、巴人や潭北の兄弟子に当たる大高源吾（俳号・子葉）の遺著とも言うべき『二つの竹』の、その題名を象徴するものと解して良からう。

すなわち、子葉の『二つの竹』の小西言水（「風の果はありけり海の音」で著名な俳人）の「序」（図二）の出だしは、「ふくらすぢめは竹にもまるゝと、何れの僧かうたひけむ」というもので、これは、謡曲「放下僧」を暗示しているようなのである（『俳句忠臣蔵（復本一郎著）』）。そして、それは、「こきりこの二つの竹の、代々（よよ）を重ねてうち治（をさ）まりたる御代（みよ）かな」の詞章と続き、この『二つの竹』の題名に、「うち治まる」（討ち治まる）との、子葉らの「討ち入り」の本懐達成の悲願が込められているようなの

である（復本・前掲書）。

【放下僧（ほうかそう）】放下（ほうか）とは、大道芸のこと。コキリコ（筑子・小切子）という竹でリズムをとりながら物語りを歌ったり、鼓で拍子をとり手品や曲芸などを見せる。僧の姿をしている者を「放下僧」といい、室町時代に、この「放下僧」を題材としての「謡曲」が作られ、「曾我物語」・「望月」・「放下僧」が三大仇討ちものとして「謡曲」や「能」で演じられるようになる。その「放下僧」の概略は、下野国（栃木県）那須烏山の南那須森田の住人牧野左衛門尉勝重が、相模国（神奈川県）の利根大膳信俊に殺害され、その殺された勝重の二人の兄弟が、大道芸人の放下僧に扮装して、諸国を遍歴した後、終に今の横浜市金沢の瀬戸神社でめでたく本懐をとげ、父の仇討ちをするというものである。後に、二人の兄弟は那須烏山に帰り、領主那須五郎之隆の前に出て、事の次第を申し上げると、之隆大いに喜び、褒美として現在の那須烏山市の善念寺西裏に永楽百貫の土地を与えて、兄弟は愛宕下に館を構え、兄は禅僧として修行し、弟は武士となったという伝承が『那須拾遺記』に記されているという。（那須烏山市・善念寺HPなど）

【二つの竹（ふたつのたけ）】赤穂藩士大高忠雄（子葉）編著の俳諧撰集。赤穂浪士による吉良邸討ち入り直前の元禄十五年（一七〇二年）九月に刊。この時期、大高は吉良義央を討つために江戸下向をする直前である。まさに大高にとつて俳人としての集大成の遺作とするために刊行した俳諧撰集である。大高忠雄と親交のあった沾徳（せんとく）、其角（きかく）、鬼貫（おにつら）など著名な俳人達が句をよせている。また大高と同じ浅野家中の俳人達、神崎則休（竹平）、富森正因（春帆）、岡野包秀（放水）、萱野重実（涓泉）の句も載っている。（『俳文学大辞典（角川書店）』）

さらに、巴人が、これらの「野州烏山滝田天満宮」に奉納句を献じたとされる「元禄十五壬午（注・一七〇二年）」の頃は、その前年の元禄十四年（一七〇一）三月に、「浅野長矩が殿中抜刀の罪で即日切腹」となった、いわゆる「元禄赤穂事件」の最中の頃であり、その九月には、時の烏山城主永井伊賀守直敬が、こともあろうに赤穂へと転封となつて、烏山城は、新城主の着任まで空城となつて幕府代官の管理下に置かれるような、そのような赤穂事件とは因縁浅からずの環境にあつたのである。

また、この句の季題「雉子」（三春）は、野州烏山を郷里とする夏目漱石門下の江口渙の初期の傑作小説の「蛇と雉（きじ）」にも出て来る那須烏山の山林などでは、よく見掛けたもので、芭蕉の「父母のしきりに恋し雉の声」（『笈の小文』）の句を引くまでもなく、古来から、その声は、哀切な響きを有している。

こうして見て来ると、この那須烏山の俳人の「こきりこ」の一句は、地元に限らず伝承的な謡曲の仇討ちものの「放下僧」を背景にして、恐らく知己である其角系沾徳門の、当時、赤穂浪士の大高源吾（子葉）の『二つの竹』（その草稿など）を目にしたの、その「討ち入り」の本懐達成の遂げて欲しいというようなことが、この句の背後に蠢いているような、そんな気配が感じられる。

この掲出句の句意は、「仇討ちものの謡曲として名高い『放下僧』の野州烏山の『牧野』の原では、小切子の音が何処からともなく聞こえ、その藪では、その小切子に応えるかのやうに雉子の声が悲しげに聞こえる。（その雉子の声は、あたかも、無念の最期を遂げた旧赤穂藩主の、浅野内匠頭の声にも、そして、その小切子の音は、主君の仇討ちに奔走している、連衆の俳句仲間でもある大高子葉が鳴らしているようにも思われる）」というようなことであろうか。

この作者・斟計が斟斗と同一人物とするならば、早野家蔵『其角点卷』（『晋其角先生出点百韻』）に、鳥山出身の巴人、そして、同じ鳥山の俳人・夕全と並んで、その名を見ることが出来る。

この百韻は、元禄十六年（一七〇三）十月二十一日に、篁影堂（貴志沾州亭）で興行されたもので、ここで、巴人は最高得点の三十九点を得ている。この百韻の発句は、夕全で、夕全は二十四点で、斟斗は、貞佐（十五点）に次ぐ、十四点を得ている。

これらの其角点は、あくまでも、この百韻に限ったもので、那須鳥山に関連する俳人の、巴人・夕全・斟斗の三人の、当時の序列を意味するものではないが、其角門の総帥・其角の視点からの序列ということになると、当時、江戸在住の巴人と、鳥山在住の夕全・斟斗の三人の關係は、この序列のような位置に居たのかも知れない。

もう一人の、後に、江戸座俳諧の宗匠の一人になる常磐潭北は、この当時は、これら三人の次の位置に居たのかも知れない。

この潭北が、享保元年（一七一六）、夜半亭一世となる早野巴人を継いで、その二世となる与謝蕪村が誕生した年に、其角の後継者の（其角の遺稿集『類柑子』を編んだ「沾州・秋色・祇空」の一人の祇空と奥羽行脚を決行し、その俳諧撰集『潮越』を編纂する（祇空は同二年に『烏糸欄』を編纂する）が、その『潮越』では、その「野州鳥山会」での発句（祇空）の脇句（客発句、脇亭主）に、「斟斗」その人の名が見られる。すなわち、元禄の第五代將軍綱吉の時代が終わって、第八代將軍吉宗の時代の、那須鳥山の俳人群団の中心に位置したのは、斟斗その人ということになる。

ここで、早野家蔵『其角点卷』（『晋其角先生出点百韻』）で、最高得点を得た巴人の、その中でも、其角の最高点印（十九点）の「半面美人画」の押印のある一句を、次に紹介して置きたい（『宝井其角全集（資料編）』所収「二四六早野家蔵『其角点卷』」）。

紫陽花の

花に

不動も

拝まるゝ

巴人

また、この百韻での、巴人と斟斗との句（其角点など）は次のとおりである。

夏草に軒もかゝらず是ハ誰

蜘蛛の巢の額にかゝる暖さ

針立を待つ閑守の昏（くれ）

寝がへりしたる廿四五年

あぢさいの花に不動も拝るゝ

塗桶も忍ぶや寺に物の音

洗足に月の欠（かける）の山嵐

はねつるべとは誰うらむ秋

借ものを又かしてやる峰の雲

月の五器夏を旨とて五条殿（

蛇（クチナワ）の素麵堰に出かはりて

小鳥の笑ふ紅粉の付顔

（巴人・「〇」）

（同・「一」）

（同・短句・「越雪」）

（同・「洞庭月」）

（同・「半面美人画」）

（同・「レ」）

（同・「一」）

（斟斗・「一」）

（同・「一」）

（同・「〇」）

（同・「洞庭月」）

（同・「一」）

上記の短句は「五七五」の「長句」に対して「短句」の「七七」句。上記の点印の点数

は次のとおりである（『宝井其角全集』・前掲書）。

「半面美人(画)」	十九点
「一日長安花」	十点
「洞庭月」	七点
「越雪」	五点
「レ」(鉤印 墨)	三点
「○」(丸印 朱)	二点
「 」(長点 墨)	一点

【点(てん)・点印(てんいん)・点者(てんじや)】点||「合点(がってん)」「引墨」ともいう。作品評価の記号。和歌・連歌・俳諧などを批評して、そのよいと思うものの肩につける「レ」・「○」・「|」などの印。また、その印をつけること。貞門になると批言(ひごん)を加えるようになって、「批点(ひてん)」と呼び、「珍重・秀逸・○印」などの点数指しを組み込まれるようになり、淡々(渭北)以後は「点者」各自が競って凝った「点印」をつくり、それぞれ独自の点式を作成し、「点取(てんとり)」の風潮を助長した。点印||長点(ながてん・ちようてん)以上の句の上に押した評点の印章。元禄十四年(一七〇一)、其角が洒落風の巻に使用した半面美人(はんめんびじん)の琴形の印(五十点)が著名である。朱と青肉を使用しはじめたのは、淡々(渭北)とされ、京都点者らは、千点相当の印まで凝って作った（『誹諧家譜』）。点者||「判者(はんじや)」「俳諧師(はいかいし)」ともいう。広くは作品に点を施す人の意であるが、専門の宗匠(そうしよう)として世間から認められた者をいう。（『俳文学大辞典(角川書店)』）

【補足（その一）】早野家蔵『晋其角先生出点百韻』の中には無点のものは無記名で、無記名のもが十一句ある。これは、無記名のまま其角の撰を受け、其角の点を得た句だけが後に作者名が記入されたものと理解される。まず、其角は、「一」（長点〓墨）をし、次に、「レ」（鉤印〓墨）と「〇」（丸印〓朱）とを区別して、「レ」（鉤印〓墨）をしたものに、「一日長安花」（二句）、「洞庭月」（六句）、「越雪」（十二句）を撰している。そして、最後に、「一」（長点〓墨）をした句（九十九句）から、一句のみを「半面美人（画）」の句を撰しているようである。すなわち、「半面美人（画）」というものは、其角の洒落風俳諧（付合）の、その興行のうちで、其角が、これは新風の「半面美人（画）」というもののみに付したような趣なのである。

【補足（その二）】『杖の土』（宋屋編著）に出て来る斟斗（斟計）の句、「筑子（こきりこ）もまき野の藪は雉子の声」を省いて、「大沢や入日をかえず雉子の声」（栢十）と「その原や朧の月も興野山」（湖十）の句を加えたのかということについては、『杖の土』の七景（七句）や『安達太良根』の六景（六句）よりも浮世絵の「東都八景」とか「近江八景」とか、いわゆる「八景物」の影響によるものと解せられる。そして、この三句は句の背景やその措辞的な用例などにおいて相互に響き合っているように思われる。

筑子（こきりこ）もまき野の藪は雉子の声 斟斗（斟計）

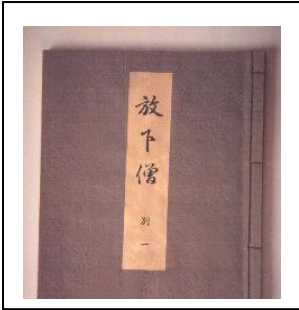
大沢や入日をかえず雉子の声 栢十

その原や朧の月も興野山 湖十

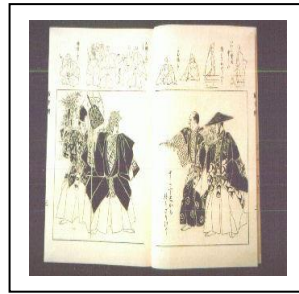
一句目の「雉子の声」と二句目の「雉子の声」、一句目の「まき野」と三句目の「その原」、一句目の「筑子（こきりこ）」の調べと三句目の「興野（きょうの）山」（「興」と「経」と

が掛けられている)の「お経(きょう)」の調べ、そして、句意的にも、一句目と二句目とは、「まき野」と「大沢」という地名の違いだけで、「雉子の声」を中心に据えた句と理解することができよう。そして、一句目と三句目とは、一句目の「まき野」が、三句目の「その原」と呼応し、今では、夜となり、「朧の月が興野山の上にある」というようなことで、二句目の柏十の句と三句目の湖十の句とは、一句目の斟斗(斟計)の挨拶句という趣なのである。さらに、二句目と三句目とは、同じ、上五の「や切り」の、下五も「体言止め」、中七の「入り日」と「朧の月」と「天文」(天空における事象)と、これまた、スタイル的に双生児という趣なのである。あまつさえ、その作者の名が、「柏十」と「湖十」と、まさに、「十」を一緒にする双生児であろう。

そして、その背後には、斟斗(斟計)の「筑子(こきりこ)もまき野の藪は雉子の声」の当時は、赤穂藩主の殿中人傷事件と切腹(第一次事件)の後ではあるが、未だ、その後の、赤穂浪士による吉良邸討ち入り(第二次事件)と自刃命令と切腹(第三次事件)の前であり、「大沢や入日をかえす雉子の声」(柏十)と「その原や朧の月も興野山」(湖十)になると、赤穂浪士が赤穂義士となり、その鎮魂の追悼句という趣を漂わせている。



謡曲「放下僧」の
謡本



謡曲「放下僧」の
謡本(観世流) 牧
野兄弟と利根の間



こきりこ(筑子・小
切子)

(十一) おわりに (潭北を中心にして)

安永六年(一七七七)、蕪村、六十二歳の時に、その日記風回想録の『新花摘』の中で次のように赤穂義士大高源吾などについて記している。

「常盤潭北が所持したる高麗の茶碗は、義士大高源吾が秘蔵したるものにて、すなはち源吾よりつたへて又余にゆづりたり。」

この『新花摘』には、蕪村固有の妖怪趣味的な狐狸談も混じっているが、その狐狸談は『宇治拾遺物語』などを模しており、実名のある「常盤潭北」とか「大高源吾」とかに関することは、全くの根も葉もないことでもなからう。

この蕪村の『新花摘』からスタートして、「蕪村の師巴人と潭北そして烏山八景句碑」と、「蕪村・巴人・潭北・烏山八景句碑」の四つの事項を鳥瞰しつつ、その管見を記して来た。翻つて、巴人や烏山八景句碑のことに比して、蕪村と潭北については、直接に烏山八景句碑に係る俳人でないこともあつて、殆どまとまった記述をしていないことに思いあたつた。

同時に、蕪村に関しては、巷間、膨大な文献を目にすることが出来るのに比して、潭北に関するものは、全くの未踏査であることをつくづくと思ひ知つた。

ということ、この「おわりに」にあたっては、潭北を中心にして、その総括的な「まとめ」をして行きたいという思いがする。

さて、潭北は、延宝五年(一六七七)、那須烏山市の赤坂町に生まれ、姓は渡辺(活躍時は常磐)、名は貞尚(さだなお)、字(あざな)は堯民(ぎょうみん)、号は潭北(たんぽく)、庵号は百花荘(ひゃかそう)と号した。

巴人は、延享四年（一六七六）の生まれで（延宝五年説もある）、潭北の赤坂町とは地続きの仲町の生まれで、二人は竹馬の友だったという思いがする。しかし、巴人は九歳の頃から江戸に赴いていて、どちらかというと、野州烏山の出身地というよりも、江戸が出身地という雰囲気の中で育ったという印象を深くする。

潭北は医者になることを志した。そして、そのための江戸の出遊は、芭蕉が没した元禄七年（一六九四）、潭北の十八歳の頃であったとされている（『烏山町史』）。

しかし、潭北が日本俳壇史上に登場するのは、宝永四年（一七〇七）、其角（享年四十七）と嵐雪（享年五十四）とが亡くなって、その其角の遺稿集（追悼集も兼ねた）『類柑子』の中の、潭北の其角追悼句が、その初出であろう。

白（うす）なれど香（こう）こそ長者の大桜

カラス山 潭北

この潭北の句については先に触れた。潭北、三十一歳の時である。作者名の上に「カラス山」とあり、この頃は烏山を本拠地として、医業が主で、俳句は余技的な、いわゆる「遊俳」としてのものであったのだろう。それに比して、この頃の巴人は、俳句を業とする専門の「業俳」の俳諧師で、宗匠（点者）として立机していたように思われる。

巴人の立机は定かではないが、先に触れて来た、元禄十六年（一七〇三）の『晋其角先生出点百韻』で最高得点を取った頃のように解したい。この時、巴人は二十八歳である。

巴人の作品が、撰集などに登場するのは、元禄十四年（一七〇一）の『杜撰集』（嵐雪著）で、この時の号は「竹雨」である（それに遡って、元禄四年（一六九一）に不角撰『若みどり』に竹雨の号が見られ、これが巴人の句の初出と理解したい）。

その翌年の元禄十五年（一七〇二）の、いわゆる「烏山滝田天満宮奉納句」（烏山八景句碑）で、それまでの「竹雨」の号を「巴人」の号に改める。この意味からも、これまでに

触れてきた「烏山八景句碑」の意義は、巴人に取っては非常に大きなものを含んでいるということになる。

そして、この元禄十四年（一七〇一）から元禄十六年（一七〇三）にかけて、これまた、これまでに取り上げて来た、いわゆる「赤穂事件」が世相を賑わしていた頃なのである。こうして見て来ると、巴人は、この赤穂事件の頃、俳諧師として俳句を専門の業とすることを決意し、それが一つの契機となつて、烏山滝田天満宮に奉納句を献じたのではないかというについても、先に触れた。

そして、潭北もまた、幼い頃の竹馬の友であつた江戸在住の巴人が、故郷に錦を飾つて、烏山滝田天満宮に奉納句を献じたことが一つの契機となつて、その巴人の手引きによつて、俳句の世界に入ったという理解も可能であらう。

すなわち、巴人が、俳句の世界に入ったのは、元禄四年（一六九一）、そして、潭北の俳句入門は、元禄十五年（一七〇二）と解し、巴人と潭北とは、その俳歴の上で、ほぼ十一年の開きがあるということになる。

さて、次に潭北が登場するのは、蕪村が誕生する享保元年（一七二六）で、それは潭北、四十歳の時の、初撰集『潮越』である。この『潮越』は、盟友、稲津祇空と奥羽地方を行脚した折の俳諧撰集で、この『潮越』で、潭北は名実共に日本俳壇史上にその名を刻んだと言つても過言でなからう。

祇空の方も、この奥羽行脚の折のものを『烏糸欄』（享保二年刊）にまとめられている。その『烏糸欄』によると、この行脚は、享保元年（一七二六）四月三日に、祇空は江戸を離れ、結城の砂岡我尚（祇空・巴人・潭北と同じく其角門で、蕪村の盟友雁宕の父）亭に赴き、ここで約束していた潭北と落ち合う。そして、祇空と潭北とは、筑波山を越えて下野を遍歴し、白河・福島・仙台・松島を経て平泉に至り、尾花沢に出て、羽黒山・山形・そして平を巡つて、再び、結城に戻り、ここで祇空は潭北と分かれている。祇空の江戸の到着は九

月十三日で、ほぼ半年に及ぶものであった。

この折の下野巡遊は、結城の早見晋我（蕪村の俳詩「北寿老仙人をいたむ」の北寿老仙
晋我）も同行していて、同年四月十一日に、室の八嶋、そして、壬生を経て、鹿沼に滞
在し、十三日には大谷観音を拝し、十四日に鹿沼を発つて、今市を経て、日光に到着する。
翌十五日に、東照宮を参詣し、十六日に華嚴の滝を仰ぎ、中禅寺湖まで足を伸ばし、十七
日に、東照宮祭礼行列を見物し、十八日に宇都宮に到着、ここで晋我と分かれている。そ
して、二十六日に、祇空と潭北とは烏山に入り、ここで、烏山の連衆と歌仙興行を催して
いる。この烏山在中に、黒羽に赴いて、芭蕉の『おくのほそ道』の足跡を辿っている。そ
して、二十九日には遊行柳に立ち寄り、那須の殺生席石を辿り、そこから白河の関へと向
かっている。

この潭北と祇空との奥羽行脚は、潭北に取って大きな成果をもたらしたものであった。
その『潮越』の歌仙等を見て行くと、露沾（磐城平藩主）・冠里（備中松山藩主）・沾徳（其
角亡き後の江戸座の代表的宗匠）・沾州（沾徳に次ぐ江戸座の宗匠）・其雫（出羽久保田藩
家老）・巴人・湖十（烏山八景碑に出て来る其角座を継承する宗匠）・秋色（其角座を其角
から湖十へ仲立ちする女流点者）・専吟（芭蕉・其角に連なり烏山八景碑に出て来る点者）
園女（芭蕉門の大阪で活躍し、其角を慕って江戸に來た女流宗匠）・花千（湖十の妻で雪中
庵二世史登の姉の女流点者）・琴風（芭蕉・其角・露沾に連なり烏山八景碑に出て来る点者）
栢十（嵐雪系の烏山八景碑に出て来る点者）・斟斗（烏山八景碑に出て来る烏山の点者）
夕全（晋其角先生出点百韻）に出て来る烏山の点者）等、当時の其角・嵐雪・沾徳に連な
る巴人・祇空と親しい俳人達が目白押しなのである。

烏山八景碑関連で、名が出て来ないのは、当時大阪に移住していた淡々（前号・渭北）
だけであろう。「野州烏山会」の下に名を連ねている当時の烏山の俳人達は、夕全と斟斗の
他に、「魚尺・索閑・翠戸・流木・里杜・如弓・桐船・沢秋・秀芳・芦刈・千通・艸逢」等

の多くの俳人の名を見出すことができる。厳密には、歌仙だけでなく発句だけの者も居り、「野州烏山会」も、さらに、「烏山魚尺会」とか「翠戸会」とかと細分化しての者も含めて
いる。

いずれにしる、烏山人景碑の背後には、中央（江戸等）・地方（烏山等）を問わず、ここに列挙した俳人達と直接・間接とを問わず何らかの縁で連なっているということであろう。さて、祇空と潭北との始めての出会い、これもまた、巴人を介在してのもので、そして、やはり、元禄十五年（一七〇二）の、いわゆる、巴人が烏山滝田天満宮に奉納句を献じたことと関連していると理解をいたしたい。

そして、この祇空と巴人・潭北との交遊は、相互に大きな収穫をもたらし、祇空（前号「清流」）は、其角が没した時、沾州・秋色と共にその遺稿集『類柑子』の編集に係わり、その「晋子終焉記」は祇空が前号の清流の名で起草している。

祇空は、寛文三年（一六六三）生まれ、潭北よりも十四歳年上である。その隠者然とした高潔な人柄を慕う者多く、その俳風は「法師風」と称された。潭北もまた、「天資剛直にして常に沈黙、無用の言を勞せず。（中略）人皆その義侠を嘆稱す。晩年諸国を周遊し、名士の門を歴訪せり」『両毛文庫栃木通鑑』と、「剛直・寡黙・高潔」な人柄で、祇空と相似るものがあつたのであろう。

潭北に取って、この祇空との約半年に及ぶ奥羽行脚は、後の潭北に大きな影響を与えたことは想像に難くない。潭北が没して二十年ほど後の、宝暦十三年（一七六三）に三宅嘯山が編んだ『俳諧古選』（卷之五）に、「潭北が奥より帰りしを喜びて、同行祇空子に申し贈る」との前書きのある、潭北の母の作が収載されている。

古郷の子をかけて見よわれもこう

潭北母

潭北が、俳諧系譜集『綾錦』（沾涼編・享保十七年刊）に、江戸座宗匠として其角門の秋色、湖十らと一緒に肩を並べるのは、巴人が江戸を去って京都に移住してしばらく立った頃である（巴人が江戸を去って、大阪を遊歴し京都に移住したのは享保十二年〓一七二七の頃である）。しかし、実際に、潭北が其角門の宗匠として認知されたのは、この、享保元年（一七一六）の前後の頃と理解をいたしたい。

巴人と潭北とは、芭蕉、そして、其角・嵐雪の時代の後の、享保俳諧史上、巴人は、江戸・京都の二都の宗匠として、また、潭北は江戸の宗匠として、野州烏山の生んだ二大俳人であることは間違いないところである。

しかし、潭北は俳諧の宗匠というよりも、『民家分量記（百姓分量記）』（享保十一年刊）、『野総茗話』（享保十八年刊）、『民家童蒙解』（元文二年刊）の著者として、全国的に名の知れた庶民（農民）教化指導者としての名声の方が遙かに凌駕していたことであろう。

この『民家分量記（百姓分量記）』と『野総茗話』との「序」は、八代將軍徳川吉宗のブレーンの一人である成島信遍（のぶみち・江戸幕府の儒者）が書いている。このことは、吉宗が進めた享保の改革の庶民教化政策にとつて、潭北の、この教訓三部作は、その中心に位置するものだったと言っても過言ではなからう。

そして、潭北の、この教訓三部作の根底に流れている思想は、『野総茗話（巻三）』に出て来る「心柱（しんばしら）」というところで、「心柱のある人ハ実人、心柱のなき人は虚人也、心柱は義なり、耻をしる也」（『栃木県史通史編四・近世一』所収「常磐潭北の遊歴と夜話（入江宏稿）」の、この「義」ということになる。

そして、「元禄赤穂事件」というのは、実は「義」の事件なのである。すなわち、その第一次事件の「赤穂藩主浅野長矩の切腹と赤穂藩の改易」は、「浅野長矩と吉良良央との『義』の事件」、その第二次事件「赤穂浪士の吉良良央邸討ち入りと仇討ち」は、「仇討ちが『私討』か『公討』とかの武士道の『義』の事件」、そして、「赤穂浪士自刃」（第三次事

件)は「統治者の『義』か被統治者の『義』かの事件」という、野州烏山の教化指導者にして俳人宗匠の常磐潭北の、その終生にわたる命題の「義」に関することだったのである。

その潭北が(二十五歳前後)、元禄十四年(一七〇一)から元禄十六年(一七〇三)にかけてのこの事件に対して、どのような感慨を抱き、どのような実践活動をしたのかは、ただ一点、この章の冒頭の、「常盤潭北が所持したる高麗の茶碗は、義士大高源吾が秘藏したるものにて」の、この晩年の蕪村が若き日の自分と潭北との関係に思いをいたし、さりげなく告白しているこの一文が、見事に語りかけているように思えるのである。

そして、赤穂義士大高源吾(俳号・子葉)は、いわば其角系沾徳門の同じ系列の兄弟子であり、其角門の、医師にして庶民(農民)教化指導者、そして俳諧、の道を邁進している潭北が、その「義」という一点に置いて源吾(子葉)と結び付いているということは、極めて自然のように思われるのである。

現に、源吾(子葉)の墓は、潭北が没した土地と思料される烏山と地続きの大田原市佐久山の、佐久山大高家の菩提寺である実相院の境内にある。

赤穂義士が葬られている泉岳寺とは別に、ここに、その墓を建立するなどに際して、潭北が何らかの係わりをして、その形見分けのようなものが、冒頭の「義士大高源吾秘藏の高麗の茶碗」で、それを、潭北が所蔵していて、それを蕪村に伝授した(第一「管見一」というこは、それほど飛躍した理解でもなからう。

そして、その伝授された蕪村が、『新花摘』の記述のとおり、その高麗の茶碗を「やがて人にうちくれたり」したということを潭北が知ったら、さぞかし、潭北は蕪村を叱咤することであろう。

これと同じようなことで、潭北が蕪村を叱咤する場面がある。それは、蕪村が松島の天隣院の長老より名取川の水底から掘り求めた逸品の埋もれ木の余り板を贈られ、それを肩

に背負って持って来たが、長途の疲れに耐え兼ねて白石の宿舎の縁の下に押し込んで帰って来たということを潭北に話した折のものである。

「結城の雁宕ががもとにて潭北にかたりければ、潭北はらあしく（気短に）余（蕪村）を罵（り）て曰（く）、『やよ（さあ）、さばかりの奇物うちすて置たるむくつけ（無風流）法師よ、其物我レ得てん、人やある（誰かいなか）、ただゆけ（すぐ行け）』と須賀川の晋流れ（須賀川の本陣・藤井半左衛門の俳号）がもとに告（げ）やりたり。」

そもそも、蕪村の奥羽行脚は寛保二年（一七四二）、二十七歳の頃で、それは全て、潭北の交遊ネットワークを頼りにしてのものであったろう。土台、松島の天麟院の長老が、乞食坊主風情の蕪村に、「名取川の水底から掘り求めた逸品の埋もれ木の余り板」を理由なしに贈るなどということは有り得ないことであろう。

これは、蕪村が生まれた頃の、二十七年前に遡る、祇空・潭北の奥羽行脚の折の、そして、潭北の『潮越』に見られる「奥州仙台」の連衆達の、潭北へのメッセーヂがその背後にあると理解すべきなのであろう。

そして、何よりも、潭北は、当時、晩年の六十六歳の頃で、江戸座の代表的な宗匠であるばかりではなく、『民家分量記（百姓分量記）』・『野総茗話』・『民家童蒙解』などの著者として、全国的に名の知れた名士中の名士なのである。それに加えて、巴人亡き後の蕪村の父親代わりのような立場でもあったであろう。

しかし、これは、蕪村を単に叱責しているのではない。潭北とすれば、潭北流の「心柱（しんばしら）のある人ハ実人、心柱のなき人は虚人也、心柱は義なり、耻をしる也」の「耻を知れ」という若者への教訓であったのであろう。

そして、先に見て来たとおりに、蕪村には、義士大高原吾秘蔵の高麗の茶碗を伝授し、

そして、この時の、この「名取川の水底から掘り求めた逸品の埋もれ木の余り板」は、祇空・潭北・巴人の共通の知己である、結城の亡き砂岡我尚の継嗣・雁宕に伝授している。これらのことは、『新花摘』の次の記述についても均しく指摘することが出来よう。

「いさゝか故ありて余（蕪村）は江戸をしりぞきて、しもつふさゆふき（下総国結城）の雁宕（砂岡雁宕）がもとをあるじとして、日夜はいかに遊び、邂逅にして柳居（佐久間柳居）がつく波（筑波）まうでに逢ひて、こゝかしこに席をかさね、或は潭北と上野に行して、処々にやどりをともにし、松島のうらづたひして好風におもてをはらひ、外の浜（津軽半島の東岸）の旅寝に合浦（津軽地方の異称）の玉のかへるさをわすれ、とぎまかうざまとして既に三とせあまりの星霜をふりぬ。」

「いさゝか故ありて」とは、「巴人が亡くなつて」の意。それで、江戸から結城の雁宕の所に居住地を代えて、「日夜俳諧に遊び」、たまたま、筑波詣での佐久間柳居に出会つて、俳席を何度か一緒にしたと言うのである。

この佐久間柳居は、元禄八年（一六九五）の生まれで、蕪村よりも十一歳年上になる。しかも、旗本の幕臣である。蕪村が単独で偶然に柳居と俳席を同じくするなどというのは、まず有り得ないことであろう。そして、この柳居は、祇空に連なる俳人で、享保十六年（一七三一）に、俳諧撰集『五色墨』（長水Ⅱ柳居・素丸ら編）を刊行し、「蕉風俳諧復興運動」の、その先駆けを為している俳人である。これまた、この背後には潭北が見え隠れしている。

そして、何よりも重要なことは、後に、蕪村が、これらの「蕉風俳諧復興運動」を結実させて、加藤暁台らと共に、明和・安永・天明期の、「中興（期）俳諧」の中心人物と目される至ったということなのである。これは、若き日の、関東出遊時代の蕪村の、

潭北との交遊を抜きにしては考えられないことであろう。

それは、潭北と蕪村との関係と同じく、潭北と結城の俳人雁宕との間にも均しく言えることであろう。

潭北は、享保七年（一七二二）に『今の月日』（『後の月日』とは同一本）を刊行する。この『今の月日』は、「京の淡々との交遊、蕉門や江戸俳壇の句風評、親句・疎句論」などを含んでいるが、その自序のとおり「古人・心友・知音を慕って著した」もので、中でも雁宕の父の「砂岡我尚追善集」という趣のものである。

ここで、潭北は我尚について、「結城砂岡我尚子は予と膠漆の間、希なる知己也」とし、その追悼句と共に、我尚が生存中の潭北との両吟や、巴人を入れての三吟、各諸家の「我尚追悼之句」などを収載している。

その中に、「孝子愛婿共に行涙を押へて」という前書きのある、「周午」と「中里氏丁雅」の句がある。この「周午」は雁宕の前号であろう（「周午は砂岡雁宕の前号か（杉浦美希稿）文学論藻四七集第六八号・東洋大文学部国文学編」）。

そして、『今の月日』には、この周午と丁雅が画を描き、我尚・潭北・周午・丁雅が句を入れて挿絵が七葉収載されている。これなどを見ると、潭北と結城の砂岡家とは、

まさに「膠漆の間」（きわめて親しく離れがたい関係）であったことが分かる。

すなわち、巴人亡き後、蕪村は、「江戸をしりぞきて、しもつふさゆふき（下総国結城）の雁宕（砂岡雁宕）がもとをあるじとして」と、砂岡家の寄宿人ということに比して、潭北は、賓客として砂岡家に滞在するという違いがあったであろう。

同時に、潭北は、我尚・巴人亡き後の雁宕の、俳諧のみならず全ての面に置いて、相談相手のような立場にあったように思われる。

そして、潭北は、この『今の月日』を刊行した頃から、俳諧関係の著作よりも、『民家分

量記』などの教訓書の著作が多くなり、各地を訪れての講演活動が多くなつて来る。

それは、宇都宮・結城・下館・関宿・古河・犬塚・佐野・赤見・安中・松井田など、下野・下総・上野の各地方の名士を歴訪するような日々であったであろう。

最晩年は、生まれ故郷の烏山の近くの、大高源吾の墓のある佐久山の縁戚（実弟）に身を寄せ、その活動範囲を関東から奥羽方面へと拡大し、「常磐」の姓ではなく、本姓の「渡辺」の署名が見られるという（『烏山町史』）。

ともあれ、「烏山八景句碑」関連の理解には、その句碑関連で潭北の名は見られないが、そこに出て来る俳人達は、ことごとく、潭北の『潮越』と『今の月日』に、その名を見出すことが出来、この二著を抜きにしての、「烏山八景句碑」関連の理解は不可能と言っても過言ではなからう。

そして、巴人・蕪村・雁宕などの理解に置いては、潭北を抜きにしては、やはり不十分との誹りは免れないことであろう。

特に、蕪村が、師の巴人の「業俳」としての世界でなく、終始、「画」を主として「俳諧」を従としていた、いわば「遊俳」との世界を全うしたということとは、「医・俳諧・教化指導者」として、やはり、潭北が「遊俳」の世界を堅持したことと、軌を一にするように思えるのである。

蕪村の師が巴人ということは今や定着しているが、巴人の盟友・潭北もまた、蕪村の師であることは、その『新花摘』が語っている。そして、その『新花摘』には、蕪村の俳詩の、北寿老仙こと、晋我もさりげなく登場しているが、その晋我追悼曲とも言われている「北寿老仙をいたむ」の、その「君」とは、単に、晋我一人だけのことではなく、その『新花摘』に出て来る巴人や潭北なども含まれているような、そんな思いがするのである。

北寿老仙をいたむ (蕪村)

君あしたに去(い)ぬゆふべのこゝろ千々(ちぢ)に
何ぞはるかなる

君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ
をかのべ何ぞかくかなしき

蒲公の黄に薺のしろう咲(さき)たる
見る人ぞなき

雉子(きぎす)のあるかひたなきに鳴(なく)を聞(きけ)ば
友ありき河をへだてゝ住(すみ)にき

へげのけぶりのほと打ちれば西吹(ふく)風の
はげしくて小竹(をぎさ)原(はら)眞(ま)すげはら
のがるべきかたぞなき

友ありき河をへだてゝ住にきけふは
ほろゝともなかぬ

君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に
何ぞはるかなる

我（わが）庵（いは）のあみだ仏（ぶつ）ともし火もものせず
花もまいらせずすごすごとイ（たたず）める今宵は
ことにたうとき



北寿老仙をいたむ（結城・妙国寺）



潭北像・『野の菊』

永らく「早野巴人顕彰実行委員会」に携わっていた斎藤穂（俳号Ⅱ最東峰）氏より「ねりんピック栃木2014俳句交流リハーサル大会」の講演をするよう依頼され、氏にはこれまで種々ご指導を賜っており、任が重いことを承知でお引き受けすることとした。

氏のご依頼の折の演題が、「蕪村の師巴人と潭北そして烏山八景句碑」ということで、これまで「蕪村研究会」（丸山一彦・中田亮・成島行雄）、そして、それを引き継いだ「下野俳諧研究会」（中田亮・橋本健・福嶋保）の後塵を拝していて、その折の輪読会・翻刻会の資料が万分とも活かされるかと、そのことのみを一縷の望みとして、「蕪村・巴人・潭北・烏山八景句碑」という、途轍もない四大山脈を只自己流で踏破することを試みた。

それは甚だ無謀なことなのであるが、まず、最初（「第一」）に、これまでの様々な「点」を「線」に繋げるような作業に従事した。その結果、「情報十三」と「管見十」ということがまとまり、これを羅針盤として、その各論ともいうべき「第二」の「芭蕉没後の元禄俳壇と烏山八景句碑鑑賞」ということで、今の時点での、その全貌の一端を垣間見ることが出来た。

しかし、これは誠に、その全貌の一端であって、これから、その頂点に至る様々なルートが開拓されることであろう。そのためには、とにかく、それは甚だ粗雑なものではあるが、それらの羅針盤の、そのデッサンなようなものを、ここに提示したい。

翻って、はじめて「烏山八景句碑」に触れたのは、『新下野俳諧史』（平成六年刊）であった。それから二十年近い時の経過がある。その間、さまざまの出会いとさまざまな発見があった。それ以上に、「蕪村研究会」・「下野俳諧研究会」の諸先生の、いわば、「種を蒔く」ような、地道な、そして、ひたむきな、その姿勢の一端をお伝えできればと、そのこのみが、この図書という形でまとめた背景なのである。

平成二十五年十月六日（「俳句交流リハーサル大会」の日）

江連 晴生

「烏山八景句碑」の作者とその周辺の俳人たち（参考一）

●其角（きかく）↓宝井其角。「寛文元年（一六六一年）↪宝永四年（一七〇七年）」。名は侃憲（ただのり）。別号は螺舎（らしや）、狂雷堂（きようらいどう）、晋子（しんし）、宝普斎（ほうしんさい）など。

●嵐雪（らんせつ）↓服部嵐雪。「承応三年（一六五四年）↪宝永四年（一七〇七年）」。幼名は久馬之助、通称は孫之丞、彦兵衛など。別号は嵐亭（らんてい）治助（じすけ）、庵（せつちゆうあん）、不白軒（ふはくけん）、寒蓼斎（かんりようさい）、玄峯堂（げんぽうどう）など。

●専吟（せんぎん）。「雪吟」は誤刻）↓初め小西似春門。のち芭蕉に親しむ。元禄六年（一六九三）、熊野・伊勢に向けて旅立った時の芭蕉の餞別吟「鶴の毛の黒き衣や花の雲」がある。秋色編『石などり』の跋文など。

●琴風（きんぷう）。「蓼風」は誤刻）↓柳川琴風。「寛文七年（一六六七）↪享保一一年（一七二六）」。摂津東成郡（大阪府）の人。江戸で岡村不卜（ふぼく）、松尾芭蕉、宝井其角に学ぶ。姓は別に生玉（いくたま）、河東。別号に絮蘿架（じよらか）、白鶴堂（はっこくどう）。

●渭北（いほく）。「渭水」は誤刻。後の号は淡々）↓松木淡々。「延宝二年（一六七四年）↪宝暦一一年（一七六一）」。別号、半時庵。元禄一三年頃、江戸へ下り渭北と号して其角に従う。其角の没後、淡々と改号。享保一一年、大坂に移る。

●柏十（はくじゅう）↓其角・嵐雪門の俳人（『元禄江戸俳諧集』）。潭北編『汐越』に湖十と並んで発句が入集されている。早野家蔵『晋其角先生出点百韻』では、巴人（三十九点）、沾徳（二十八点）、湖十・堤亭（二十五点）、夕全（二十四点）に次いで、六位（二十二点）を占めている。

●湖十（こじゅう）↓深川湖十（初代）。『延宝五年（一六七七年）』元文三年（一七三八年）。はじめ鼠肝（そかん）のち其角に学ぶ。其角の没後、点印を受け継いで其角座を主宰した。元文三年七月二十七日死去。六二歳。本姓は森部。別号に木者庵、老鼠肝、其角堂など。

●巴人（はじん）↓早野巴人。「延宝四年（一六七六年）』寛保二年（一七四二年）。与謝蕪村の師。のち夜半亭宋阿（やはんてい）と改める。下野国那須郡烏山（現・栃木県那須烏山市）に生まれる。幼くして（九歳の頃）江戸に出て俳諧の道を志す（宝井其角、服部嵐雪の門人となり俳諧を学ぶ）。享保一二年京都に移る。元文二年砂岡雁宕の誘いにより江戸へ戻り、夜半亭を日本橋本石町に構える。この時に号を宋阿とする。寛保二年六月六日夜半亭にて病没。享年六七。

○潭北（たんぼく）↓常盤潭北。「延宝五年（一六七七年）』延享元年（一七四四年）。宝井其角の門人。下野国那須郡烏山（現・栃木県那須烏山市）に生まれる。与謝蕪村とも親しく、俳書に『汐越』『今の月日』（別称『後の月日』）など。医業に従事していたが、庶民教育を重視し、関東一円を講話してまわり、『民家分量記』（別称『百姓分量記』）などを出版した。延享元年七月三日死去。六十八歳。本姓は渡辺。名は貞尚。字（あざな）は堯民。別号に百華荘など。

○斟計（しんけい。「斟斗（しんと）」と同人か？）↓烏山の俳人。潭北編の『汐越』には「斟斗」の名が見られ、「野州烏山会」の中心的俳人と思われる（発句Ⅱ祇空、脇Ⅱ斟斗、第三Ⅱ潭北）。姓は大金か（？）現在の「烏山八景句碑」を建立した後代の大鐘新斗（しんと）と何らかの関係のある俳人か（？）早野家蔵『晋其角先生出点百韻』では十一位（十二点）となっている。

○夕全（ゆうぜん）↓烏山の俳人。潭北編『汐越』に「烏山 夕全」、『俳諧千鳥掛』に「下野 夕全」で発句が入集されており、早野家蔵『晋其角先生出点百韻』では、斟斗（十二点）、柏十（二十二点）より上位の、湖十に次いで五位（二十四点）を占めている。

○沾徳（せんとく）↓水間沾徳。「寛文二年（一六六二年）」享保一一年（一七二六年）」。内藤露沾の弟子。『別座舗』の連衆の一人。後に享保期の江戸の中心的俳人となる。

○百里（ひゃくり）↓高野百里。「寛文六年（一六六六年）」享保一二（一七二七年）」。初号、茅風。のち雷堂百里。嵐雪門。雁宕・巴人ほか彼の影響を受けた俳人は少なくない。

○祇空（ぎくう）↓稻津祇空。「寛文三年（一六四四年）」享保一八（一七三三年）」。初号、青流。別号、敬雨・石霜庵・有無庵など。はじめ維中門、のち其角門。正徳六年（一七一六年）、潭北と陸奥国に遊び、享保二年（一七二七年）に『烏糸欄』としてまとめる。

○露沾（ろせん）↓内藤露沾。「明暦（一六五五年）」享保一八（一七三三年）」。磐城平藩（福島県いわき市）藩主、内藤風虎の次男。幼名は五郎四郎義英、のち政栄。別号に傍池亭、遊園堂。兄他界のため家督を継ぐ立場にたつが、お家騒動にまきこまれて、天和二年病氣

を理由に退身。早くから俳諧に親しみ風虎サロンの若亭主として活躍するが、退身後は江戸蕉門とも交流した。

○冠里(かんり)↓安藤信友の俳号。「寛文十一年(一六七一年)〜享保一十七年(一七三二年)」。
備中(岡山県)松山藩主安藤重博の長男。元禄十一年父の跡をつぎ、松山藩主安藤家二代となり、奏者番、寺社奉行をつとめる。宝永八年美濃(岐阜県)に移封、加納藩主安藤家初代となる。六万五千石。大坂城代から享保七年老中。俳諧をよくし、宝井其角に入門、冠里と号した。享保一十七年七月二五日死去。六二歳。

○其雫(「きてき」・「きか」)↓「寛文十一年(一六七二年)〜享保五年(一七二〇年)」。
出羽久保田藩(秋田県)家老。江戸在勤中に榎本其角に学ぶ。同門の田代紫紅をともなつて帰国し、秋田に蕉風を広めた。享保五年二月二五日死去。四九歳。名は忠昭。通称は外記、半右衛門。別号に白雲洞、撫松。

○子葉(しよう)↓赤穂義士の大高原吾の俳号。「寛文十一年(一六七二年)〜元禄一六年(一七〇三年)」。
播磨(兵庫県)赤穂(あこう)藩士。四十七士の一人。藩主浅野長矩(ながのり)の死後、江戸に出て、脇屋新兵衛と変名し吉良義央(よしなか)邸をさぐった。討ち入り後、元禄一六年二月四日切腹。三二歳。名は忠雄(ただたか)。著作に「丁丑紀行」、編著に「二つの竹」。

○春帆(しゅんぱん)↓赤穂義士の富森助右衛門(とみのもりすけえもん)の俳号。

○竹平(ちくへい)↓赤穂義士の神崎与五郎(かんざきよごろう)の俳号

○涓泉（けんせん）↓赤穂義士の萱野重実（かやのしげざね）、通称・三平の俳号。

○宋屋（そうおく）↓「元禄元年（一六八八）〜明和三（一七六六年）」。姓は望月。京都の人。早野巴人の門人。京都の巴人門をひきい師の追善集「西の奥」を刊行。著作に奥の細道をたどった吟行集「杖（つえ）の土」など。遺句集に三宅嘯山（しょうざん）ら編の「瓢箪（ひょうたん）集」がある。別号に富鈴、百葉泉、机墨庵。

○蕪村（ぶそん）↓姓は谷口、のち与謝（よさ）と改める。俳号は落日庵、紫狐庵、夜半亭など。画号も四明、朝滄（ちようそう）、長庚、春星など数多い。摂津国東成郡毛馬村（現、大阪市）に生まれ、享保二十年の頃に江戸に下った。元文二年、京から江戸に戻った夜半亭宋阿（早野巴人）の内弟子となり、幸町（後に幸鳥）の号で江戸俳壇に出る一方、絵画にも親しむ。寛保四年・延享元年、初撰集の『宇都宮歳旦帖』を編み、そこではじめて「蕪村」号を名乗る。明和七年、五十六歳の時に、「夜半亭二世」を継承。天明三年に没す。享年六八。

（注）『俳文学大辞典』（角川書店）、『俳書・人名・地名・索引』（日本俳書大系十六）、『元禄江戸俳諧集（今泉準一編）』（白帝社）、「デジタル版日本人名大辞典」（ネット辞典）などに因った。●印は、現存する「鳥山八景句碑」の作者に関すること。○印は、現存する「鳥山八景句碑」の周辺に関連する俳人などに関すること。

早野巴人と常磐潭北の対照年譜（参考二）

（注）

①『下野俳諧史（中田亮著）』（栃木俳句作家協会）・『巴人の全句を読む（丸山一彦監修）』（下野新聞社）・『宇都宮歳旦帖を読む（丸山一彦著）』（下野新聞社）・『栃木県史（史料編・近世八）』（栃木県史編纂委員会）・『栃木県史（通史編四・近世一）』（栃木県史編纂委員会）・『からすやま文学の碑散步道（皆川晃著）』（烏山教育委員会）・『享保江戸俳諧攷（楠元六男著）』（新典社）・『俳文学大辞典（尾形仂他編）』（角川書店）を参考とした。

②○印は巴人関連事項。●記は潭北関連事項。△印は当該年の俳諧史の背景となる事項。□印は巴人・潭北没後の巴人・潭北関連事項と俳諧史の背景となる事項。全て俳人名のみ記載し姓は省略した。

延宝 四（一六七六）

○巴人・一歳。下野国（栃木県）那須郡烏山の早野家に生まれる。名は忠義、通称、新左衛門。初号、竹雨。別号、宗阿・宋阿。庵号、松下庵・郢月泉・夜半亭。

△芭蕉・三三歳、嵐雪・二三歳、其角・一六歳。

延宝 五（一六七七）

●潭北、一歳。下野国（栃木県）那須郡烏山（赤坂町）の渡辺家に生まれる。名は貞尚、字は堯明、潭北と号す。庵号、百華荘。長じて常磐姓に改める。

元禄 四（一六九一）

○巴人・一六歳。不角撰『若みどり』に竹雨の号で入集。巴人の句の初見と思われる。

△芭蕉、落柿舎に入り「嵯峨日記」を草す。去来・凡兆編『猿蓑』刊。

元禄 七（一六九四）

- 巴人・一九歳。
 △芭蕉没、享年五一歳。其角編『枯尾花』刊。
- 元禄一四(一七〇一)
 ○巴人・二六歳。嵐雪著『杜撰集』に竹雨の号で入集。
- 元禄一五(一七〇二)
 ○巴人・二七歳。烏山滝田天満宮に烏山八景の句を奉納、願主巴人。少なくとも元禄一五年の頃には竹雨を改めて巴人を号したと思われる。
- 潭北、二六歳。巴人・祇空との親交はこの頃か。
- △芭蕉著『おくのほそ道』刊。祇空江戸に下り其角門に入る。
- 元禄一六(一七〇三)
 ○巴人・二八歳。早野家蔵『晋其角先生出点百韻』で連衆一五人の中で巴人は其角点の最高の三九点を得る。
- △『三冊子』(土芳著)・『去来抄』(去来著)この頃成る。
- 宝永 元(一七〇四)
 ○巴人・二九歳。序令編『のぼり鶴』に入集。
- 宝永 二(一七〇五)
 ○巴人・三〇歳。百里編『銭龍賦』、渭北(淡々)編『安達太郎根』・沾徳編『余花千句』・「橋南」に入集。
- 宝永 四(一七〇七)
 ○巴人・三二歳。沾洲ら編『類柑子』、百里編『風の上』(嵐雪追善集)入集。
- 潭北・三一歳、沾洲ら編『類柑子』に入集。
- △其角没・享年四七歳、嵐雪没・享年五四歳。
- 宝永 五(一七〇八)

○巴人・三三歳。巴人の奥羽行脚はこの頃か（浄阿編『つかのかげ』。百里編『とおのく』に入集。

宝永 六（一七〇九）

○巴人・三四歳。忠義没、享年五四歳。沾徳編『宝永己丑歳旦』、千泉編『注連縄』、淡々編『磔山』に入集。

正徳 元（一七一）

○巴人・三六歳。淡々編『十歌仙』・沾徳編『枝葉集』に入集。

正徳 二（一七一二）

○巴人・三七歳。沾石編『俳諧耕作』に入集。

正徳 三（一七一三）

○巴人・三八歳。湖十編『二（ふた）のきれ』（其角七回忌追善集）・秋色編『石なとり』（其角七回忌追善集）・周竹編『きくいただき』（嵐雪七回忌追善集）に入集。

正徳 四（一七一四）

○巴人・三九歳。月夕編『楓の林』に入集。

正徳 五（一七一五）

○巴人・四〇歳。祇空編『みかへり松』に入集。

享保 元（一七一六）

○巴人・四一歳。潭北編『汐越』に入集。

●潭北・四〇歳。『汐越』を編む。祇空と潭北、陸奥国に遊び、享保二年の『烏糸欄』としてまとめる。

△蕪村生まれる。

享保 二（一七一一）

○巴人・四二歳。祇空編『烏糸欄』・雁山編『通天橋』・仙鶴編『十二月箱』に入集。

- 潭北・四一歳。『烏糸欄』に入集。
- 享保 四(二七一九)
- 巴人・四四歳。芳室編『阿女』に入集。
- 享保 六(二七二一)
- 巴人・四六歳。沾徳編『後余花千二百句』に入集。
- 潭北・四五歳。野州・総州各地を巡遊して郷民の教化に務めた講話を集め一書とする。
- 『民家分量記』(内題『百姓分量記』)、野州犬塚村黒川家で脱稿。
- 享保 七(二七二二)
- 巴人・四七歳。潭北編『今(後)の月日』に入集。
- 潭北・四六歳。潭北編『今(後)の月日』刊。
- 享保 八(二七二三)
- 巴人・四八歳。淡々編『其角一七回』(其角一七回忌追善集)・拾翠編『ひろ葉』(嵐雪一七回忌追善集)、一漁編『俳諧ふた昔』に入集。
- 享保 九(二七二四)
- 巴人・四九歳。倫里編『葉の雫』に入集。
- 潭北・四八歳。『婦登故呂故』稿成る。
- 享保一〇(二七二五)
- 巴人・五〇歳。沾洲編『百千万』に入集。
- 享保一一(二七二六)
- 巴人・五一歳。仙鶴編『水精宮』(沾徳百箇日追善集)・紹廉編『ちりの粉』に入集。
- 潭北・五〇歳。『民家分量記』を刊行。
- 享保一二(二七二七)
- 巴人・五二歳。この年までに剃髪して江戸を出立し、大阪を遊歴して京都に移住する。

露月編『俳諧宮遷』・露月ら編『閨の梅』・如臯ら編『蝶の使』に入集。

享保一三(一七二八)

○巴人・五三歳。露月編『歳旦帖』に入集。

享保一四(一七二九)

○巴人・五四歳。野月泉の号の句が『俳諧象潟集』(蓬萊軒編)・『俳諧草むすび』(隆志編)に入集。

享保一五(一七三〇)

○巴人・五五歳。淡々編『神の笛』・三升編『父の恩』に入集。

享保一六(一七三一)

●潭北・五五歳。貞佐編『梨園』に入集。

享保一七(一七三二)

○巴人・五七歳。巴人編『卯花千句』を上梓。竿秋編『衣替着田(きさらぎだ)』に入集。

●潭北・五六歳。潭北編『歳旦帖』刊。沾涼著『綾錦』に入集。この『綾錦』の「俳諧系譜」の宗匠としてその名が見られる。

享保一八(一七三三)

○巴人・五八歳。巴人編『一夜松』を上梓、北野神社に奉納。芳室編『石霜庵追善集』(祇空追善集)に入集。

●潭北・五七歳。『野総茗話』を刊行。

享保一九(一七三四)

○巴人・五九歳。米仲編『たつのうら』に入集。号を宗阿に改号か。

●潭北・五八歳。淡々編『紀行誹談二十歌仙』に入集。

享保二〇(一七三五)

○巴人・六〇歳。貞佐編『梨園』(其角二五回忌追善集)に入集。

●潭北・五九歳。貞佐編『梨園』に入集。『民家童蒙解』を刊行。

元文 元(一七三六)

○巴人・六一歳。『鄧月泉興行百韻』のなかで巴人は宗阿の号を用いている。この年、雁宕が上京し、江戸への帰国を誘因する。百庵編『毫(ふで)の秋』・永機編『此長月』に入集。

●潭北・六〇歳。沾涼編『烏山彦』に入集。

元文 二(一七三七)

○巴人・六二歳。春、京都を出立し、日本橋本石町に夜半亭を結ぶ。隆志編『籬の下』・重雪編『誹諧明星台』・羅人編『一日万句嘉定蒲簀』に入集。

●潭北・六一歳。重雪編『誹諧明星台』に入集。

元文 三(一七三八)

○巴人・六三歳。宗阿編『戊午歳旦』を上梓。『高峨亭興行五十韻』で宋阿と改号か。

元文四年(一七三九)

○巴人・六四歳。宋阿編『己未歳旦』を上梓。宋阿編『誹諧桃桜』左右二卷成る。左巻は其角追善集、右巻は嵐雪追善集。楼川編・『楼川歳旦帖』・寥和編『風の末』・富鈴(宋屋)編『梅鏡』に入集。

●潭北・六三歳。宋阿編『誹諧桃桜』に入集。

元文五年(一七四〇)

○巴人・六五歳。富鈴(宋屋)編『小春笠』、有佐編『其砧』(貞佐七回忌追善集)に入集。

寛保 元(一七四一)

○巴人・六六歳。宋阿編『辛酉歳旦』を上梓。これが巴人の最後の歳旦帖となった。

寛保 二(一七四二)

○巴人・六七歳。この春の頃から口中に痛苦を覚え、次第に発語もままたぬ状態となって、その六月六日にこの世を去った。「こしらへて有(あり)とは知らず西の奥」はその辞世の

一句である。六月六日没。

●潭北・六六歳。蕪村と下野・上野を巡遊。

△巴人没後、蕪村、一〇年余、北関東流寓。嬰利編『造化集』（巴人一周忌追善集）刊。

寛保 三（二七四三）

□芭蕉翁五〇回忌。中興俳句運動始まる（天明三年芭蕉翁百回追善・実際は九〇回忌の四

〇年間）。富鈴編（宋屋）編『西の奥』（巴人一周忌追善集）刊。

延享 元（二七四四）

□蕪村の処女撰集『寛保四年（宇都宮）歳旦帖』が刊、そこで初めて「蕪村」の号が用いられる。

●潭北・六八歳。蕪村編『（宇都宮）歳旦帖』に入集。七月三日没。

宝暦 五（二七五五）

□雁宕ら編『夜半亭発句帖』刊。（巴人の一三回忌に雁宕・阿誰・大濟らが、巴人の遺吟の中から二八七句を選び四季別に編成し、巻末に追善百韻一卷と諸家の追悼吟五三句を収録した。）

宝暦 八（二七五八）

□宋屋編『戴恩謝』（巴人一七回忌追善集）刊。

宝暦 一〇（二七六〇）

□潭考編『さざれ貝』（潭北十三回忌追善集）刊。

安永 三（二七七四）

□蕪村編『むかしを今』（巴人三三回忌追善集）、浄阿編『つかのかげ』（巴人三三回忌追善集）刊。

安永 四年（一七七五）

□潭考編『野の菊』（潭北三十三回忌追善集）刊。

天明 三(一七八三)
□ 蕪村没、享年六八歳。

(補注)

① 巴人の出生については、富鈴編(宋屋)編『西の奥』(巴人一周忌追善集)の享年六七歳を逆算して延宝四年説と『那須郷土史』の享年六六歳を逆算しての延宝五年説とがある。「夜半亭巴人(穎原退蔵稿)」(『穎原退蔵著作集一三巻』)には、「なほ『俳諧家譜』には享年六十六歳としてある。もし『那須郷土史』がこれに従って行年六十六歳としたならば、寧ろ『西の奥』の六十七歳説を正しいとすべきであらう」とあり、これらに關しての「夜半亭巴人出自考」(『連歌俳諧研究(池田俊朗稿)』第五六号)の論述により、この年表では延宝四年説をとっている。② 巴人から宗阿の改号については、「元文四年夜半亭発句帖」(『国語と国文学(丸山一彦稿)』昭和二三・一二号)では、元文四年に刊行された富鈴(宋屋)編『梅鏡』に基づき享保寅(一九九年)の秋に改号されたとする(『享保江戸俳諧攷(楠元六男著)』は「享保末年(二〇〇年)改号説を支持する」との記述)。この年表では、享保十九年に「号を宗阿に改号か」とし、宗阿の号が初見される元文元年に『郢月泉興行百韻』のなかで巴人は宗阿の号を用いている」との記述をした。なお、宗阿から宋阿の改号は、元文三年の『高峨亭興行五十韻』での改号が初見と思われる。③ 享保七年刊行の潭北著『後の月日』(国立国会図書館蔵本)と別の題名の『今の月日』(京大穎原文庫蔵本)とは同一のものであり、ここでは『今(後)の月日』とした。

「巴人来鳥の謎」(皆川晃著・早野巴人顕彰実行委員会刊行) 周辺覚書(参考三)

※「早野巴人顕彰実行委員会」に携わった斎藤穂(俳号Ⅱ最東峰)氏の所蔵図書のご案内並びにご教示を賜った。内容は、次の講演のものが集約されている。

① 「鳥山八景」句碑私考(平成元年七月九日)

② 早野巴人来鳥の謎(平成二年七月十五日)

上記の①の『鳥山八景』句碑私考については、『からすやま文学の碑散歩』(皆川晃著)所収「29 鳥山八景(其角・嵐雪・巴人他)句碑」を口述化したもので、骨子は同じである。

1 はじめに 2 「鳥山八景」の紹介 3 鳥山八景の俳句と俳人 4 地方文書「佐藤充氏蔵」——下野国那須郡瀧田村朝日観音堂江奉納額写—— 5 安達太良根(松木淡々著)——鳥山八景句の写—— 6 杖の土(望月宋屋著)——鳥山八景句の写—— 7 鳥山八景の原句形を求めて—— 8 まとめ——俳諧奉納額の句形——

上記の②の「早野巴人来鳥の謎」については、上記の①のものを更に進めて、赤穂義士との関連での、著者の「私解・私見」的な一試案としての集約・口述化という内容である。

1 はじめに 2 鳥山八景句の意味するもの 3 俳人名の意味するもの 4 巴人送別(其角)の句 5 松の廊下刃傷後のこと 6 赤穂浪士と俳諧——宝井其角とのかかわり—— 7 結びとして

上記の①と②とを収載している「巴人来鳥の謎」(皆川晃著)は平成四年に刊行されているが、その後、平成六年に『宝井其角全集』(編著篇・資料篇・年譜篇・索引篇)の四巻、石川八郎・今泉準一他共編、勉誠社)、平成十一年に『蕪村の師巴人の全句を読む——『夜

半亭発句帖』輪読——』（丸山一彦監修・蕪村研究会編）が刊行され、従前不明確であったことなどの一端がやや明らかになって来ている（それらの対比で、上記②の『五元集』収載の句などは新たな検討が必要になって来るであろう）。

一 上記の②の「4 巴人送別（其角）の句」について

鳥山へおもむく人に

青柳やつかむ程ある蚊の声に

夕やや白き鶏垣根より

鳴焼は夕べをしらぬ世界かな

麻村や家をへだつる水車

この前書きは一句目の「青柳やつかむ程ある蚊の声に」のみに掛かるもので、この句は「巴人送別の句」ではなく、「渭北送別の句」である（『宝井其角全集・資料篇』p388・p500）。二句目から三句目についても、巴人とは関係のない句と解すべきなのである。

二 上記の②の『鳥山八景』の句碑建立の場所を、滝田村朝日観音堂に選んだのか（いまだ解りません）（p33）に関連して、巴人は、京都に移住して『一夜松』を刊行するが、これは「北野天満宮」に奉納している。巴人が「鳥山八景」の奉納句を献じたのも、『杖の土』の記載のとおり、「野州鳥山滝田天満宮」（祭神Ⅱ菅原道真命、鎮座地Ⅱ旧坂下一二五番地へ奉遷、『鳥山町史』「神社一覽表」と「黒崎寿談」）で、現在の「東江神社」（祭神Ⅱ武みか槌命、鎮座地Ⅱ滝田字寺町八六二番地）や「朝日観音堂」ではないと解すべきなのである（現在の地の建立は「下野国那須郡瀧田村朝日観音江奉納額社 檜山豊山」のものに基づいている。そして、現在の句碑の建立者、願主Ⅱ大鐘新斗、補助Ⅱ大久保文隣などの大久保家臣団や当時の鳥山俳壇との関連の考察が必要になって来るであろう）。

参考文献（参考四）

- ① 『下野俳諧史』・中田亮著・栃木県俳句作家協会・昭和五七
 - ② 『新下野俳諧史』中田亮監修・江連晴生著・石田書房・平成六
 - ③ 『蕪村の師巴人の全句を読む』丸山一彦監修・蕪村研究会編・下野新聞・平成一一
 - ④ 『蕪村の「宇都宮歳旦帖」を読む』丸山一彦監修・蕪村研究会編・下野新聞・平成一二
 - ⑤ 『からすやま文学の碑散歩』皆川晃著・鳥山町教育委員会・平成三
 - ⑥ 『早野巴人来鳥の謎』皆川晃著・早野巴人顕彰実行委員会・平成四
 - ⑦ 『夜半亭早野巴人ノート』手塚七木稿・『七木雜記帖』（鬼怒発行所）所収・昭和五八
 - ⑧ 『鳥山町史』鳥山町史編集委員会編・昭和五三
 - ⑨ 『鳥山風土記』加倉井健蔵著・新生社・昭和四〇
 - ⑩ 『大田原市史（前編）』大田原市史編集委員会編・昭和五〇
 - ⑪ 『栃木県史・史料編・近世八』栃木県史編編さん委員会編・昭和五二
 - ⑫ 『栃木県史・通史編四・近世一』栃木県史編編さん委員会編・昭和五六
 - ⑬ 『常磐潭北論序説』飯倉洋一稿・『江戸時代文学誌第八号』所収・平成三
 - ⑭ 『潭北の教訓本』飯倉洋一稿・『雅俗一九九五・一月号』所収・平成七
 - ⑮ 『其角と芭蕉と』今泉準一著・春秋社・平成八
 - ⑯ 『其角と冠付』今泉準一稿・『明治大学教養論集九九号』所収・昭和五一
 - ⑰ 『蕉尾琴に載る作家』今泉準一稿・『明治大学教養論集一一八号』・昭和五四
 - ⑱ 『蕪村と江戸俳壇』清登典子稿・『江戸人物読本与謝蕪村』所収・平成二
 - ⑳ 『俳句忠臣蔵』復本一郎著・新潮選書・平成三
- 『宝井其角全集（全四冊）』今泉準一他編著・勉誠社・平成六

（その他、本文中に記してある。）